

の者。

それを無事に門内へ入れた處を見ると、これは疑ふべくもなき此の邸内の人、さうして見れば薩州の家來には強盜を内職にしてゐる者がある筈である、いかに亂世とは云ひながら大名の家來が強盜を内職にしてゐるといふのはあるべき事ではありません。

その晩はそれで歸つて翌日早々に忠作は神田の佐久間町の裏長屋を引拂つて此薩州屋敷の傍へうつる事にしました。幸、三田の越後屋といふ蕎麥屋に雇人の口があつたから直ぐに其處へ雇はれました。忠作が此の蕎麥屋へ奉公して見ると此の界限の物騒な事は神田や本所のそれ以上でありました、越後屋は大きな蕎麥屋で、奥座敷などが幾つもあるが其の奥座敷は屢一癖ありげな侍に借切られる事があります。忠作は算勘が利いて才氣があつたから出前持をせず

帳場へ座らせられる事になつて三日目の晩、店へ現れた田舎者體の男と計らず面を見合せて、

「おやお前さんは」

「お前さんは」

これは甲州の、徳間入の川の中以來の會見であつて田舎者らしい男は七兵衛であります。

七兵衛は奥座敷を一つ借り切つてそこで一人で飲んでゐると暫らくして忠作がやつて来て一別以來の話になりました。

お絹の事や、がんだりきの事が出て、七兵衛は可なり忠作をからかつてゐたが

「私の姪が此の峰須賀様に御奉行をしてゐるんで、それで斯うして

やつて来ました」

六

七兵衛がこゝで姪と云ふたのはお松の事でありませう。お松は此の時分、徳島藩の中屋敷へ奉公をして居りました。徳島藩の中屋敷は薩州の邸とは塀一つを隔てた處にあつて、お松は其處に奉公してから日もまだ浅いけれども、目上にも朋輩にも信用され可愛がられて、前に神尾の邸にゐた時のやうな危ない事は更になし、まことに無事に暮らして居りました。

此の際お松は今までにない一つの縁談をほのめかされました。この話は至極實直に持ちかけられ、さうして自分の身を落ち着けるには決して爲にならない處ではないし、自分も亦身を落ち着けてから、見込んで世話した人の鑑識を裏切るやうな事はないつもりだと自信はしてゐるけれども、お松は如何しても其れを承諾する氣にはなれませんでした。

斷るならば何と云つて斷らうか知ら、其れが一つの難題で折角ああ云つて呉れる親切を無下に斷つてしまへば、お互に氣マヅくなつてまた自分は此のお邸を出なければならぬ事になるかも知れぬ。さうなるごまた落着く處に迷ふかも知れぬ。お松は其の晩散々に此の事を考へてしまひました。

無事に暮らしてゐたけれども兵馬の事を考へないわけには行きませぬ。兵馬の事は忘れたことは無いのに、幾度も其れを考へ直さねばならなくなりました。

深いやうで浅い二人の縁、浅いやうで深い二人の間、お松には其れ

を如何して宜いかわからない、兄妹のやうにして永らく一緒にゐたけれど、どうも物足りない、兵馬其の人に不足は無いかれど、自分よりは仇討の方を大事がる兵馬がお松には如何しても物足りないのでした。

と云つて兵馬さんは、わたしを可愛がらないのではない、わたしを一番可愛がつてゐるし、わたしも亦兵馬さんが一番可愛ゆいけれども其れだけでは頼りがない、わたしが此處で外へお嫁に行つてしまつても、兵馬さんは口惜しいとも悲しいとも思ひはしないで、却て祝つて下さるでせう、それでは詰らない、お嫁に行つてしまつたのを喜んで呉れるやうな可愛がり方では其れでは詰らない、とお松は其れを物足りなく思ひました。駿河の清水港で別れてから、船と共に江戸へ着いたお松、船頭が徳島藩の出入りで其の引きで此處へ世

話をされて来てから兵馬の便りは一度甲府からあつた丈でした。七兵衛は二度ばかり訪ねて呉れたけれども、いつも風のやうに来て風のやうに歸つてしまふ。その度毎に手紙を書いて置いては其れを兵馬の手許に届けて貰うことをお松は何よりの楽しみにしてゐました。近いうちまた七兵衛が来る筈、お松は此の頃、部屋に下がる毎夜のやうに手紙を書くことばかり、今も色々と思ひ悩まされた揚句がその思ひの丈を紙にうつすことによつて、其の憂を晴らさうとしました。

お松は自分の今の生活が至極平穩無事であること、御殿でも皆の人に可愛がられて昔のやうな心配は更に無い事、朝夕朋輩衆と笑ひながら働いてゐる事などを細々と書きました、自分の身は其んなに無事幸福であるけれども、江戸市中は日に増し物騒になつて行つて、

兇器を持つた浪人者が横行したり、貧窮組が出来たりこの末世は如何なつて行く事かと市民が心配してゐる事、それ故滅多に外出は出来ない事、附近に薩州を初め内藤家、久留米藩などの大きな屋敷があつて殊に隣の薩州家などは浪人者が澤山に出入して朝夕戦場のやうに見える事もあるけれど、こちらのお屋敷は静かであることなどを書きました。さうして幾度か読み直したり書き直したりした上で漸く封をしてしまひました。

それを枕元に置いてお松は床に就きましたが、兵馬の事を夢に見ました、夢に見た兵馬は嬉しい人であつたが、やつぱり物足りない人でありました。

翌朝起きて見ると、昨夜書いた机の上に載せて置いた自分の手紙の上に、それとは全く別の人の書いた一封の手紙が載せてありました。封を切つて讀むと、

「誰が置いて行つたのでせう」

お松は其の手紙を取上げて見るとこれは七兵衛の手蹟でありました封を切つて讀むと、

「兵馬様の身の上に變事が出来たから急に相談したい、少しばかりの暇を願つて、越後屋まで来るやうに」

この事でありました。

お松は胸が潰れる思ひがして、直様朋輩に頼んで少しばかりの暇をこしらへて越後屋の奥座敷へ訪ねて見ますと、七兵衛が待つてゐました。

「突然にあつて云つてやつたから驚いたらう、困つた事が出来たといふのは、兵馬さんが縛られて甲府の牢へ入れられてしまつた事だ」

「え、あの方が縛られて牢へ、それは一體、如何したわけござ

います」

「其のわけには中々入り組んだ仔細があるのだが、人違ひなのだ、人違ひで捉まつて甲府の牢へ入れられてゐる、そりや運が悪く、悪い處へ通りかゝつたのが兵馬さんの因果、身の明りの立つまではあして甲府の牢内に窮命しておゐでなさらなくてはならねへ」

「どうして其んな悪い處へ通りかゝつたのでございます」

「盗賊だ、盗賊のかゝり合だ」

「盗賊！そんな事はありますまい何と間違つても兵馬さんが盗賊なんぞと、そんな間違ひのある筈がございませぬもの、伯父さん早く心配して兵馬さんの身の明りが立つやうにして上げて下さい」

「それに就て、俺も實は困つたのだ、トテも當り前の手術で兵馬さんの明りを立てる事は出来ないから、仕方が無いからお前に相談に

来たのよ」

「だつて、伯父さん、盗賊をしない者が盗賊の罪を被るなんて、お役人だつて譯りさうなもの、盗賊をするやうな人としなない人とは一目見ても譯りさうなもの、伯父さんが早く行つて兵馬さんは其んな人ではございませぬと明りを立てゝおやりなされば、お役人が直に御承知になりさうなものではございませぬか」

「いや、役人も兵馬さんが盗賊をするやうな人でない事はよく御存知なのだが、どうも丁度、御金藏へ盗賊が入つた晩、兵馬さんがちやんと身拵らへをして其處に居たのだから如何しても、本物の盗賊が出て来るまでは兵馬さんは赦されまいと斯う思うのだ」

「そんなら早く其の本物の盗賊が捉まるやうに骨を折つて上げて下さいまし」

「それは随分骨を折るけれども、何しろ悪い事をするやうな奴だから何處に居て、いつ捉まるか譯らねえ、それに就てお松、お前に相談だが、俺が一つ兵馬さんを牢内から盗み出して来るから、お前何處かへ兵馬さんを當分隠して呉れないか」

「え、兵馬さんを御牢内から盗み出して来るつて、伯父さんが」  
お松は眼を睜つて、

「伯父さん、そんな事をしないで、お役人によく仔細を話して、さうでなければ他に其の道の人を頼んで兵馬さんを助けるやうにして上げて下さいまし、お上の御牢内から盗み出すなんて、そんな危ない事をしてはお互の爲にならないではありませんか」

「それだ、何しろ、今の時勢は此んな時勢だから眞直な事ばかりは通らねえのだ、當り前の事をしてゐた日にはトテも急に兵馬さんを

助け出すことは出来ねへのだ」

「困つた事でございますねえ、御牢内のおかゝりよりもモット土のお役人を頼んでお願ひをして見たら如何でございませう」

「そこに一つの當りが無えわけでは無えのだ、實はあの方の係りがお前の知つてゐるあの神尾主膳様よ」

「神尾主膳様、あの傳馬町のわたしの元の御主人様が……」

「いかにも其の神尾様が此方を失敗つたものだから甲府詰を仰付かつたのだ、お旗本で甲府詰になるのはよく、でもう二度と浮ぶ瀬が無いやうなものだ、それであるの神尾様も甲府へ行つて自暴半分に中々良くない事をなさるさうだ」

「そんなら伯父さん、その神尾様が御牢内の方のお係りでありましたら、わたしが此れから彼方へ行つてお願ひ申して見ませう、兵馬

さんは決して其んな悪い事をなさる人では無いといふ事を、わたしから神尾の殿様によく申上げてお願ひ申して見ませう』

『それなんだ、お前も一旦の御主人であつて見ればお前から願つて見れば聞いて下さるかも知れぬ、と云つて、あの殿様は中々性質の良くない殿様だ、お前が取り成した爲に却て餘計な面倒が起りはしないかと、俺は其れを心配するよ』

『神尾の殿様だつて、丸つきり物のおわかりにならないお方ではございませぬ、わたしが一生懸命になつてお願ひをして見たら、きつとお聞き入れ下さることゝ思ひます、若しそれで可けませんでしたら、伯父さんの仰有る通り、兵馬さんを盗み出すなり如何なりした方が宜うございませう、さうなればわたしも覺悟をしますから、どんなにしても兵馬さんをお隠し申します』

『成程……併し、お前も今は主人持、こゝで甲府まで出かけるといふわけには行くまいからな』

『行きますとも、甲府までも何處までも参りますとも、他の事とは違ひますから、わたしはどんなにしても、此方のお暇をいたゞいて甲府へ参ります』

『若し暇が出なかつたらお前は如何する』

『お暇が出なければ……わたしはお邸を逃げ出しても宜しうございませう』

『成程……』

七兵衛が暫く考へてゐましたが

『お前が其處まで了見を定めて呉れたなら、俺は一つお前を連れて甲府へ乗り込むことにして見やう、素直にお暇の出ない事は知れて

ゐるから、今夜、わしが人目に立たぬやうにお前の處へ迎ひに行く  
其れまでに身の廻りの物を用意して待つてゐるが、それからお  
邸の間取お前の部屋の案内を聞かして置いて貰ひたい」  
そこで七兵衛はお松から邸の内部の模様をやゝ委しく聞き取つて二  
人は此の店を別れました。

七

お松は七兵衛と別れて、越後屋の奥座敷を出て薩州邸の長い土塀を  
グルリと廻つて徳島藩の裏門を入りました。  
その晩、お松は色々の思で手近のものを用意して、日の暮るのを待  
ち兼ね、日が暮れると、夜の更けるのを待ち兼ねてゐました。他の

女中達は晝の疲れで早くから眠つてしまひました。お松は女中部屋  
の戸を細目に開けて待ち構えてゐました。

屋敷の庭には大きな池があつて池の向ふには高い火の見櫓が立つて  
ゐます。お松が夜更けて七兵衛の合圖を待つ時分に、此の火の見櫓  
の上二つの黒い影法師がありました。共に夜番や火の番の類では  
なく、覆面をして兩刀を差して一人は手に籠燈を携へてゐました。こ  
の二人の武士は相當に身分あるものらしく、櫓の上から目の下に見  
ゆる薩州邸の内を仔細に見てゐました。さうして一人の丈の高い方  
が矢立と紙を取り出して見取圖を作つてゐました。  
お松は其處に人のあることは知らないで、一心に七兵衛の合圖ばか  
りを待つてゐると、池の中へトポーンと礫の音。  
その音を聞いて、お松は立ち上がりました。戸を細目に開けると聞



の中ながら、今何處からともなく落ちて来た礫が、池の水を動かして波紋がゆら／＼と汀の水草の根を揺つてゐるのを見てお松は胸を轟かしながら四邊を見廻しました。續いて第二の礫の音。

この時火の見櫓の上で見取圖を作つてゐた丈の高い方が、

「今の音は」聞きとがめると

「池の中で魚が跳たのでムらう」

脊の低い方が答へる。

「魚の跳る音では無かつたやうだ」

「と云ふて此の夜中に」

「兎も角、あの音は礫の音、事によると薩州の方で誰か此處を認め

た奴があるかも知れぬ」

「油断はなり申さぬ」

薩州邸内の見取圖を作つてゐた二人の武士は櫓の上から前後左右を警戒すると、脊の高いのが急に紙と筆を下へ投げ捨てるやうに差し置いて、

「怪しい奴」

手裏劍を抜いて發矢と投げる、投げた方角は薩州邸の馬場から此邸の隔ての塀あたり、低い方の武士は下に伏せてあつた籠燈を手早く持ち直して其の方角に突き附けると池の上を飛ぶやうに汀を走つて女中部屋の方へ行く怪しの者。

二人の武士は高い處にゐたから怪しい者の影を籠燈の光に照しては見ただけで、大きな聲を揚げて屋敷の中を騒がすべく遠慮する處があつたものらしい、それで、

「怪しい奴」

「取逃がしたか」

と火の見櫓の上で面を見合せて空しく下の闇を立つて見てゐると、池のほとりて、

「何者だ！」

「呀！」

洶然と水の中へ落ち込んだやうな物の音。

「出合へ、々々々、今女中部屋へ曲者が入つた、早く出合へ」

丁度この時邸外を通り合せたのが白金に屯所を置く莊内藩の巡邏隊でした。短い槍と小銃を携へた四人の隊士が一人の伍長に率ゐられて、三田通りを巡邏して此の邸の外まで来た時に、邸内で曲者あり出合へといふ聲を聞いたから、そこで五人が一時に立ち留まりました。

「御同役、何か此の邸内で變事が御座つたやうじや」

「左様、何か物騒がしい」

市中取締が、この時分には町奉行の手だけで治まりのつかかなかつた事は前に言ふ通りであつたから幕府は譜代の大名と五千石以上の旗本を擇んで、其れれ、持場々々を定めて八百八街を巡邏させたのでありました。さうして、最も危険區域とされた三田の薩州邸附近伊皿子、二本榎、猿町、白金邊を持場として割當られたのが莊内藩であります。

この莊内の巡邏隊は今、徳島藩邸内の騒ぎを聞いて足を留めて中の容子を窺つてゐると、脇門がギーツと開いて其處から形を現はしたのが、以前火の見櫓で繪圖面を取つてみた覆面の雨筒。

「さてこそ」

巡邏隊は短槍と小銃とを構えて二人に附きつける。

「これは巡邏隊の諸君か、お役目御苦勞」

中から出て来た兩箇は、却て心安げに言葉を掛けたが此方は油断をしないので、

「名乗らつしやい、我々は莊内藩の巡邏隊でござる」

「拙者は上の山の金子六左衛門」

大きいのが答へると低い方が、

「拙者は堤作右衛門」

上の山の金子六左衛門は六左衛門で通る人でありました。六左衛門

といふよりも其の一名興三郎の方が通りが宜かつた事もあります。

さきに新徴組が清川八郎を覘う時屢其金子の家で會合した事があり

ります。金子は新徴組の連中と交りが善かつたばかりでなく、其の

頃聞えたる各藩士及び志士とは大抵往來してゐました。其の主張する處は幕府を佐けて尊王の志を成さんとするのでありました。朝廷と幕府との間の調和を謀るが爲には非常に働いた人でありました。藩内では家老であり、その時代には一種の志士として畏敬されてゐたのであつたから莊内藩の巡邏隊は其れを聞いて、やゝ意を安んずる處あつて、

「これはく、上の山の金子殿でござつたか、それとは知らず失禮を致しました、我々は白金屯所の莊内藩巡邏隊、拙者は伍長の齋藤角助と申す者」

と名乗りました。齋藤角助も金子六左衛門の名を聞き知つてゐました。

そこで齋藤角助は隊士に槍と鐵砲を引かせ

「この邸内が物騒がしいやうでござるが……」

「如何にも、只今怪しい奴が忍び込んで、女を一人奪つて逃げたと申す事」

「女を奪つて逃げたと申されまするか、それは聞き捨てならぬ事」

「あの土塀を乗り越えて逃げたとやらだが、まだ遠くへは行くまいと思はれる」

「諸君、追ッ蒐けて見給へ」

それは遣り過してしまつて金子六左衛門は先に立つて歩きながら堤作右衛門を願みて、

「一網打盡にやつてしまはねば可かぬわい」

といふ、堤は其れに答へて、

「如何にも、思ひの外念が入つた仕方ではござるな」

「不屈きな奴等じや、誰か大きな頭があつて指圖をしてゐるのに違

ひない、中の容子は丸で要塞だ、いざと云へば幕府の兵を引受けて

防戦する覺悟でゐるから、まづ謀叛と見ても差支へない」

「お膝元を怖れぬ振舞じや、若し大きな頭があつて、其の指圖とあ

らば、此のまゝに置くは幕府の威信に關はる」

六左衛門と作右衛門の話は徳島藩邸内で女が浚はれたといふ事とは

全く別な話でありました。斯うして二人は、三田通りの越後屋まで

引上げて來ました。

八

この頃、また上野の山下へ一軒の變つた床屋が出來ました。

變つたといつても店の體裁や職人小僧の類、お客の扱に別に變つた處はなく、「銀床」といふ看板、鬢盤、尻敷板、毛受、手水盥の類まで別段世間並の床屋と變つた事はない、たゞ一つ變つてゐるのは此處の主人がてんぼうであつた事だけであります。

どうしたわけか此床の主人には右の片腕がありません。滅多には店へ出て來ないけれども、職人小僧の使ひぶりは上手であるらしい。この床屋の店先まで

「如何です、皆さん、大きな聲では讀めねへが此んなものが出ましたせ」

「何でございます」

「まあ讀からお聞きなさいまし」

「聞きやせう」

懐から番附やうのものを取り出してお客の一人が、

「宜うございますか、恐れながら賣弘めのため口上……」

「成程」

「此度徳川の橋詰に店出仕り候家餅と申すは本家和歌山屋にて菊の千代と申弘め來り候も此度相改め新製を加へ極あめりかに仕立趣向仕り候處、これまで京都堺町にて賣弘め候牡丹餅も少し流行に後れ強慾に過ぎ候三條通にて山の内餅をつき込み……」

「は、ア成程、御養君の一件だね誰がこしらへたか大相なものを拵へたものだが、うつかり其んなものは讀めねへ」

「ナニ、御威勢の盛んな時分なら此んなものを拵へる奴も無からう拵つたつて世間へ持つて出せるものではねへが、何しろ今のやうな時勢だから公方様の悪口でも何でも斯うして版行になつて出るん

だ」

「それだどつてお前、滅多に其んな物を持つて歩かねへが、いせ、岡ッ引の耳にでも入つて見ろ、たゞでは済まされねへ」

「大丈夫だよ、何しろ公方様の御威勢はもう地に落ちたんだから、

トチも治まりは着かねへのだ、あゝやつて貧窮組が出来たり浪人強盗が流行つたり天誅が持ち上つたりしてゐる世の中だ」

「悪い〜、公方様の悪口なんぞを云つては悪いぞ」

「構うものか、公方様も今時の公方様は餘ッ程エライ公方様が出な  
くちやあ納まりが着かねへ、このお江戸の町の中で、お旗本よりも  
お國侍の方が鼻息が荒いんだから、もう公方様の天下も未だ」

「何だど此の野郎」

「何でも無え、實地の處を云つてるんだ」

「野郎、巫山戯た事を吐すな、このお膝元で、永らく公方様の御恩

になつてゐながら、公方様の悪口を云ふなんて飛んでもねへ野郎だ」

雑談が口論となり口論が喧嘩にならうとする處へ、

「まあ〜、皆さん、お静かになさいますし」

現れたのは問題の片手のない中刺の上手な親方。

「憎い野郎だ、公方様の悪口なんぞを云やがつて」

一人は餘憤勃々、それを銀床の親方は和めて、

「少し酔つぱらつゝるやうでございませうね」

「太え野郎だ、どうも眼つきがオカしいから彼んな奴が薩摩の廻し

者なんだらう」

「ナニ御酒の加減でございますよ」

親方が頻りに和めてゐる處へ

「これ神妙にしる、今、公儀へ對して無禮の言を吐いたものは誰だ」  
 ヅカ〜と茶袋が一人入つて來ました、入つて來ると共に茶袋は店  
 前に落ちてゐた紙片を手早く拾ひ取つて、威丈高に店の者を睨みつ  
 けます。

茶袋といふのは、幕府が此の頃募集しかけた歩兵の事で、筒袖を着  
 て袴腰のあるズボンを穿いてゐるから其れでさう云つたもので、あ  
 んまり良い人が集まらなかつたから、多くは市中の破落戸を集めた  
 ものであります。どうも仕方が無いから此の破落戸を集めて歩兵隊  
 を組織して西洋流に訓練をさせて行つたが本來破落戸であつたのが  
 急に茶袋を穿き、かりそめにも二本差すやうになつたから是等の連  
 中の威張り方といつたら無い、それで市民は茶袋々々といつてゲヂ  
 ゲヂのやうに思つてゐたものです。今も今とて公方様の不敬問題で

口論した揚句の處へ此の茶袋がやつて來たから、床の者は皆んな惡  
 い奴が來たなど思ひました。

「公方様へ對して悪口を申上るなんてソんな事は決してあるものじ  
 やございませせん」

腕の無い親方が詫をいふ。

「黙れ〜、こゝにゐる客人のうちで、公方様の悪口を申し上げた  
 奴がある、恐れ多くも今の公方様では納まりが着かぬ、浪人者の方  
 が旗本よりもズツト鼻息が荒いなごゝ高聲で噪いでゐたと知らせて  
 來た者がある、誰が其のやうに無禮な事を申したか名乗つて出る、  
 これへ名乗つて出る、名乗つて出なければ店の者共を片つばしから  
 引括る」

「どうも相手が悪い、と店の者は震え上りました。」

「そんな譯ではございません……實は」

最前の口論の相手になつた男、然も其れは公方様を悪く云つたのではなく、公方様を悪く云つたのを憤慨した方が何か申譯をしやうとすると、

「貴様だらう、無禮者奴！」

茶袋は飛んで行つて其男の横面をビシリと打つて、其の手を逆に捻上げてしまひましたから、

「ア、これは、これは、滅相な事をなされますな、私は公方様の悪口なんて、そんな事を申し上げた覚えはございません」

「いや、貴様に違ひない、お膝元に住居致し永らく徳川家の御恩を蒙りながら、公儀に對して悪口を申すとは言語道斷な奴」

「いえ、私が何で其の様な事を申しませう、實は……私の方で

それを止めましたので、そんな事を云つては恐れ多いと其れを留めましたのでございますから……飛んでも無い、私がそんな事を」

「此奴が、く、自分の罪を人になすり付けやうと致すか、いよいよ以て圖々しい奴」

茶袋は其の口を捻ぢ上げました。

それを見兼ねて片腕の親方が割つて出で

「これは歩兵様、まあお聞きなすつて下さいまし、このお方は決して左様な事を申し上げたのではございません、實は斯ういふわけなんでございます」

「貴様は何だ」

「私は此の床の亭主でございます、銀と申します、私が細かい事を存じて居りますから、どうかお手をおゆるめなすつて一通りお聞



「さなすつて下さいまし」

「貴様、知つてゐるならナゼ最初から知つてると申さん、正直に云つて見ろ」

「公方様の悪口を申上げるほどの事ではございません、たゞ話の調子でございまして、ツイ威勢のいゝ事を申しましたのが、少しばかり聲が高くなりましたので、それも此のお方ではございません、そんな事を申しましたお客様はたつた今お歸りになつてしまひましたので、このお客様なんぞは傍で聞いて居りまして其んな事を言つては宜くならうせと氣を注げて上げた位でございまして、どう致しまして公方様の悪口なんて、私風情が其んな事を申上げやうものなら口が曲つてしまいます。この方は其れをお留め申したゞけでございまして、どうか御勘辨なすつて下さいまし」

「ナニ、この男が悪口を申上げたのではない、他の客が云つたのを此の男が留めたのだと、然らば其の客といふは誰だ」

「其は只今お歸りになりました」

「歸つた、歸つた處で貴様の店の得意だらうから所番地は知つて居たらう、何の町の何といふものだ、さあ其れを云へ」

「それが丁度お通りがりのお客でございまして、ツイお名前も處もお聞き申して置きませんでした」

「白々しい言譯を申すな、どうも當節はやゝもすればお上の御威光を軽く見る奴が有つて奇怪じや、見せしめの爲に嚴しくせんければならん、亭主この上彼是申すと貴様も同罪だぞ」

「飛んでも無い事で、どうか其のお方はお許しなすつて下さいまし其のお方が悪い事を申上げたので無いことは、ドコまでも私共が證

人でございます』

『喧しい、強つて此奴が悪口を申上げた事で無いとならば、其の本人を此處へ連れて来い、その本人が出て、私が申しました、恐れ入りましたと白状した時に限つて此奴を許してやる』

『それは御無理と申すもので、九つきり證據も何も無い事でお捕まへなされるのは餘まり御無理な事で……』

『ナニ、證據が無いから無理だと、證據呼ばりをして言ひ抜けをしやうなぞ、はい、いよく以て圖々しい、證據が有らうとも無からうとも我々歩兵隊の耳に入つた以上は退引のならぬ事じや、併し、理非曲直が立たねば政道も立たぬ道理じや、歩兵隊は無理を云はぬといふ證據に其の證據を見せてやる、これ見ろ、これは今貴様の家の店前で拾つたのもじや、さあ此れを見たら文句はあるまい』

突き出したのはこの店へ入りがけに茶袋が拾つた一枚の紙、それは今讀んだ「恐れ乍ら賣弘めの爲の口上、家傳、いるもち、別製煉ようくん」と書いた、紛れもなく今の將軍家を誹謗した劇物です。悪い奴に悪い物を拾はれました。

『この證據を見た上は文句はあるまい、文句のない上に、亭主、貴様の罪が重くなつたぞ、さあ拙者と同道して兩人共に我々の兵營まで罷り出る、後の奴等は神妙に待つて居れ、お差圖があるまで此處を動いてはならんぞ』

この危急存亡の秋に天なる哉、命なる哉、ゆらり〜と此の店へ繰込んだものがありました。それは長者町の道庵先生でありました。

『親方、これは如何したといふものだ』

道庵先生は抜からの面<sup>かほ</sup>で此<sup>こ</sup>の場へ入<sup>はい</sup>つて來<sup>き</sup>ました。

## 九

「おや、これは長者町<sup>ちやうじやまち</sup>の先生<sup>せんせい</sup>、お出<sup>い</sup>でなさいまし、實<sup>じつ</sup>は斯<sup>か</sup>ういふわけなんで……」

片腕<sup>かたうで</sup>のない髪結床<sup>かみゆひきこ</sup>の亭主<sup>ていしゆ</sup>は手短<sup>てみじか</sup>に此<sup>こ</sup>の場<sup>ば</sup>の仔細<sup>しさい</sup>を物語<sup>ものがた</sup>ると、道庵<sup>だうあん</sup>は感心<sup>かんしん</sup>したやうな面<sup>かほ</sup>をして聞<sup>き</sup>いてゐましたが、

「はゝあ成程<sup>なるほど</sup>、それは歩兵<sup>ほへい</sup>さんのお聞<sup>き</sup>き間違<sup>まちが</sup>ひだらう、時<sup>とき</sup>に歩兵<sup>ほへい</sup>さん、わたしは此<sup>こ</sup>の長者町<sup>ちやうじやまち</sup>に住<sup>す</sup>んでゐる道庵<sup>だうあん</sup>と云<sup>い</sup>つて、長者町<sup>ちやうじやまち</sup>では可<sup>か</sup>なり面<sup>かほ</sup>の古<sup>ふる</sup>い男<sup>をとこ</sup>でございますから、どうか私<sup>わたし</sup>にお任<sup>まか</sup>せなすつて下<sup>くだ</sup>さいまし」

「相成<sup>あいな</sup>らん、引込<sup>ひっこ</sup>んでゐる」

「そんな事<sup>こと</sup>を仰<sup>おつしや</sup>有<sup>あ</sup>らずに、私<sup>わたし</sup>にお任<sup>まか</sup>せなすつて下<sup>くだ</sup>さいまし、男<sup>をとこ</sup>に不足<sup>そく</sup>もございませうが、どうか道庵<sup>だうあん</sup>の面<sup>かほ</sup>を立てゝ、お任<sup>まか</sup>せなすつて下<sup>くだ</sup>さいまし」

「諄<sup>くさ</sup>い、外<sup>ほか</sup>の事<sup>こと</sup>とは違<sup>ちが</sup>つて苟且<sup>かりそめ</sup>にも上様<sup>うへさま</sup>の悪口<sup>あくこう</sup>を申<sup>まを</sup>し上げた奴<sup>やつ</sup>、その分<sup>ぶん</sup>には捨<sup>す</sup>て置<sup>お</sup>き難<sup>がた</sup>い」

「そんな事<sup>こと</sup>を仰<sup>おつしや</sup>有<sup>あ</sup>らずに、まあお任<sup>まか</sup>せなすつて下<sup>くだ</sup>さいましよ」

道庵<sup>だうあん</sup>先生<sup>せんせい</sup>は幽靈<sup>ゆうれい</sup>のやうな變<sup>へん</sup>てこな手<sup>て</sup>つきをして、突然<sup>いきなり</sup>茶袋<sup>ちやぶくろ</sup>の首根<sup>くびね</sup>つ子<sup>こ</sup>へ嚙<sup>か</sup>ちりつくやうにしましたから、茶袋<sup>ちやぶくろ</sup>は腹<sup>はら</sup>が立<sup>た</sup>つやら可笑<sup>おか</sup>しいやら

「無禮<sup>ぶれい</sup>な奴<sup>やつ</sup>、控<sup>ひか</sup>へる」

「歩兵さん、そんな事を仰有つては可けませんよ、第一、私にした  
 處で、こゝにあるお客にした處で皆んな此のお江戸で育つた人達で  
 すよ、江戸に生れた人で権現様のお蔭を蒙らぬ人はござんすまい、  
 その権現様以来の上様の悪口なんぞを申上げる者が、江戸つ子の中  
 にある譯のものではございませぬよ、ですから其れは嘘に定まつて  
 りますよ、私が成り代つて此の通りお詫を致しますから、今日の處  
 は大眼に見てやつてお呉んなさんしよう」  
 道庵先生だつて、責任のある處へ出て口を利かせれば、さう無茶ば  
 かり言ふものではありません。相當の條理を立て、詫てゐると、茶  
 袋はいよく附上り、  
 「貴様は、今此處へ來たばかりで何も事情を知らん、其の事情を知  
 らん者が、出しや張つて仲裁振をするとは猪口才だ、此方には確に

訴へ出でた人もあり、この通り證據もある、なほ申開くことがあら  
 ば屯所へ出てから申せ、貴様も證人として出たくば引張つてやる」  
 歩兵は五月蠅から道庵の胸倉を取つて嚇かすと、  
 「歩兵さん、歩兵さん、まあお待ちなさいまし、どうか穩かに話を  
 致さうではございませぬか、一體貴方様方は町奉行や酒井様などの  
 やうな古手といつては失敬だが、舊式のお役人と違つて、斯うして  
 開けて來た西洋の新式の調練を受けておゐでなさる歩兵さんでござ  
 いませう、それですからモウ少し話がわかりさうなものでございま  
 すね」

と云つて道庵は、自分の胸倉を取つた歩兵の腕を逆に取り返しまし  
 た、逆に取り返したと云つても、其れを逆指や片胸捕で鮮かに取締  
 て大向ふを隠らせるやうな藝當が此の先生に出来る筈はないが、不

思議な事に荒つぼく道庵の胸倉を取つた茶袋が、それを逆に取り返される。甚だ大人しく其の手を外して、

「うむ、左様言はれ、ば成程だ、我々は町奉行や新徴組のやうな融通の利かぬ者共とは違つて、新式の訓練を受けてゐるものだ、高島流の砲術も江川流の測量も一切心得てゐる」

「左様でございませうとも、人の胸倉を取るなんといふ事は皆んな舊式の兵隊のする事でございませう、歩兵さんに限つて其んな事はございませぬ、やつぱり西洋流に斯うして握手といふ事をなさるんでございませうね」

歩兵が存外温和しく外した手を道庵先生が握り締ると、

「は、あ、貴様は中々話せる、醫者だけあつて、脈處が旨いわい」茶袋は急にニコ／＼して來ました

今まで威張も腐つてゐた茶袋が急に面を崩して、

「貴様は話せる」

と云つて道庵と握手をして、

「よし、萬事貴様に任せてやる、貴様から此の者共をよく説諭してやるが宜い、拙者も今日の處は特別の穩便を以て聞き捨てにして遣はす」

「いや、どうも有難うございます」

道庵は額を丁と拍つて、取つて附けたやうなお辭儀をした時分には折角包みかけた道庵が危なく轉げ出して來ました。

「貴様は少々酔つてゐるやうだな」

「へえ、いつでも酔つぱらつてゐるのでございます、町内では酔つぱらひで御厄介になつてゐるのでございます」

何か譯らない事を云つてまたお辭儀をする、茶袋は其の形を可笑がつて澁面を作り、

『以來、氣を附けろ』

と云つて出て行つてしまひました。道庵先生の出る幕は、大抵の事が茶番になつてしまひます。夫婦喧嘩でも何でも道庵一たび出づれば大抵は茶にして納まりを附る、それが時としては道庵の一徳であり時としては道庵先生の人格を軽くする所以となる事もあります。併し乍ら此の場の働きは、慥に先生の器量を一段と上げてしまひました。何となれば此れはお鍋や八公の夫婦喧嘩とは違つて相手が始末の悪い茶袋と來てゐた處へ、事は上様の不敬問題だから、屯所へ引張られた上は先づ生命は覺束ないものと思はなければならぬ、それを道庵が出て易々と解決を着けてしまつたから、今まで黒山の

やうに人集りしてゐた連中が、こゝで一度に哄と喝采しました、そうして口々に先生の器量を讃める言葉を記して見ると斯ういふ事になります。

『如何でゲス、あの道庵さんは太したものじやあございませんか、お前さん御覽なすつたか、あゝして一旦胸倉を取られた處を道庵さんが逆に取り返した、彼處が見物なんでゲス、あれが其の柔術の方で逆指と云つて左の指を甲の方から斯うして掴んで掌を上の方へ斯う向けて強く揚げるんでゲスな、さうすると其れ指を取られた方は騒げば騒ぐ程此方が其の拳を自分の方へ向けて斯う曲げるものですから指が折れてしまふ、柔術取りの名人にあゝして指を取られてしまつたが最後、もう動きが附くことじやあございませんからな、それで流石の茶袋も我を折つて降参してしまひました』

「左様ですか。あの先生が其んな柔術取りの名人とは今まで知らなかつた、酔つばらつて引轉返つてばかりゐるから腰抜かと思つたら、矢張其れじやあ何でござんすかな、道庵先生は柔術の方もちやあんと心得てゐるのでございますかな」

「其處がそれ、能ある鷹は爪を隠すと云ふんで、先生あゝして白ばつぐれて酔ばらつてゐるけれど、武藝十八般悉く胸へ壘み込んでゐる處を俺はちやんと見て取つた、その上にお醫者さんで脈處を心得てゐるから鬼に金棒でございませうよ」

「成程それにしてもオカしいのは、あの茶袋が道庵先生に手を取られると、痛いとも痒いともいふ面をしないでニコ／＼と笑つた處が譯りませんな」

「いや左様でない、あの茶袋もあれで柔術にかけては中々の取り手だが、何しろ道庵先生に會つては其の敵でないと、つまり自分に心得があるだけに彼を知り己を知るんでげすな、だから指を取られると直ぐにお前は話せると云つて莞爾と笑つて、尋常に引上げた處があれで味のある處で、道庵さんが敵を取締ながらベコ／＼お辭儀をして先を立て、置く呼吸なんぞも却々見上げたものでございませうな エライものでございます」

輿論は往々士氣人形をも偉大なものに擔ぎ上げてしまひます。道庵先生も此で暫らく輿論の勝利者となりました。

其のあとで床屋の親方は道庵先生を座敷へ招いて一口差上げ

「先生、お蔭様で助かりました、一體どうしたわけでござります」

「あはゝゝ」

道庵先生は笑つて、

「あれは二兩取りといふ新手だ、あれで首尾よく取締ってしまった」  
 「いや町内では、もう大變な評判で、先きから入り變り立ち變りお  
 禮にやつて來ますが、何でも先生が柔術の達人で、茶袋を手玉に取  
 つて投げたと云つて騒いでゐますが、その二兩取といふのは矢張り  
 柔術の手なんでございませうかね」

「あはゝゝゝ」

道庵は一段と大口を開けて笑ひ、

「柔術の手だとも、俺が新發明の柔術の新手だわい、尤も古い型を  
 少しは取り入れてあるんだがな、それを場合に當つて器用に施し用  
 ひたといふのが拙者の働しさ」

「その型を一つ傳授を受けたいものでございませうね」

「あはゝゝ、宜いとも、二兩取りの型を一つ話して遣らう、先づ最

初に茶袋が、わしの胸倉を取つた時、その手先を逆に取り返したわ  
 しの働きを見たかい、あの時それ、そつと一兩握らしてやつた」

「成程」

「さうして利き口の處を見てゐると、グンニヤリと來たから此奴は  
 手答へがあるわいと其れを下へ持つて行つて西洋流の握手をやる時  
 にまた一兩、それで都合二兩取り、わしの方から云へば二兩取られ  
 だ、それでスツカリ柔術が利いてしまつた、二兩取りの新手といふ  
 のは、つまり其れだけのものさ」

「成程、そんな事だらうと思つて、私もあの時にお手の中を見てゐ  
 ました、私の方で其の手を先に用ひさへすれば何の事は無かつたの  
 でございますが、あの茶袋の言ひ分が餘まり癪にさわるものでござ  
 いませうからツイ持前が出て、先生に落を取られてしまひました、由



譯のない事でございます」

「それは左様と親方、お前さんは何か此の道庵に内緒の頼みがある  
と云ひなすつたから、其れで俺はやつて来たのだが、内密の頼みと  
いふのは一體何だね」

「其りや先生、本當に内密なんでございますがね、本人も先生なら  
ばといふし、私共も先生をお見かけ申してお願ひの筋があるんでご  
ざいますかね」

「大變に改まつたね、この呑んだくれをまた忌やに買ひ被つたね」

「全く先生をお見かけ申してお絶り申すんでございますから」

「氣味が悪いな、さうお見かけ申して見かけ倒しにされてしまつて  
は堪まらねえ、餘まりお絶り申されて引き倒されても遣り切れねへ  
が、男と見込んで頼まれりや、おれも道庵だ、随分頼まれて見ねへ

限りもねえのさ」

「實は先生、人を一人預かつて戴きたいんでございますがね、たゞ  
預かつて戴くんなら何處でも宜しうございますが、暫らく隠して置  
いて戴きたいんでございます、先生ならば預ける方も安心預る方も  
安心なんでございますから」

「俺に人を隠匿へといふのか、そりや大方謀叛人とか兇狀持とか、  
碌な奴じや有るめえ、いくら男と見込んで頼まれても、其んなのを  
預かるのは御免を蒙りてえが、それも事と品によつては随分引受け  
て見ねえ限りも無えのさ、まあドンな人間だか云つて見て御覽」

「先生、謀叛人とか兇狀持とか其んな物騒な人じやございませぬ、  
女の子でございます、女の子を一人預かつて戴きたいんでございま  
すが」

こゝで片腕の無い床屋の親方といふのが「がんだりさ」の百藏の變形であること申すまでもありません。道庵先生は、百藏の口から何事をか頼まれると

「遠くの親類より近くの他人といふ事もあるテ」

と云つて漂々と其の床屋を出かけてしまひました。

道庵が此の床を出て行くといふに

「少々物を承はりたうございます」

小またの切れ上がった女が小風呂敷を抱えて店前に立つて

「おや百藏さん」と云つて驚きました。これは女輕業の棟梁お角であります。

それから百藏がお角を連れて山下の雁鍋へ来て飲みながらの話。

「親方、お蔭様で全く助かりました、近いうち兩國でまた一旗揚げる都合ですから何卒御最負を頼みます」

「それはまあ宜かつた、甲府へ残して置いた連中も皆んな無事で居なすつたかね」

「え、皆んな無事で居りましたが、たゞ一人だけ如何しても見つからないんですよ、あれがわたし共一座の花形なんです、火事場から何處へ行つたか、焼け死んだ容子もないから何處かへ逃げたんだらうと、よく土地の人に頼んで置きました、広い處ではありませんから其のうちには見付かるだらうと思つてゐますよ、あれが見付かりさへすれば、一人も缺けずに面が揃ひますけれど、さうでなくてつも近いうちは花々しくやつて見る當りが附きましたのは皆んな親方のお蔭でござんすよ、あの時に親方がゐて下さらなければ一座

の者は目も當られない醜態になつてしまふ處でした』

『俺も少しばかりのお金が、お前さんのお役に立つて嬉しいといふものだ』

『それから親方、府中でお目にかゝつた時はお前さんは慥か百藏さんと仰有いましたが此處で銀造さんと仰有るのは如何いふわけでございます』

『百藏の方は近ごろ通りが悪いから、それで銀造と變へたのだ、銀造といふのが餓鬼の時分からの名前さ、これから百の方はやめにして銀の方だけにして貰ひたい、もう一つの頼みは成るべく甲州といふ事を云つて貰ひたく無えのだ、お前と俺との馴染もあの時限りの事にして、人が聞いたら兄貴だとか親類だとか云つて済まして置いて貰ひてえのだ』

『宜うございますとも、それはさうと親方、お前さんは、ほんとうにお神さんが無いのですか、あの時のお話ではお神さんは三年前亡くなつたやうなお話でしたけれど、何だか當になりませんね』

『ナニ、嘘を吐くものか、お神さんなんぞは有りやしねえ』

『それが矢張嘘でございますよ』

『それじゃ何か、俺にお神さんが有るといふのかね』

『有りますとも大有りです』

『此奴は聞き物だね、無いものでも有ると云はれりや悪い氣持はしねえが、お前から左様いはれると如何やら痛くねえ腹を探られるやうだ』

『申譯をするだけ弱身があるんですね、隠したつて駄目ですよ』

『驚いたね、あゝして男世帯の銀床に無えものは女氣と亭主の片腕』

だと町内でこんな評判を立てられてゐる處へ、お前だけが俺に濡れ衣を着せやうといふものだ」

「そりや可けません、この家に女氣が有るか無いかといふ事は、一目見れば直にわかりますよ、女は細かい處へ氣が附きますからね」

「それでは、俺の家に女がゐるといふのかね」

「左様ですとも」

こんな事から痴話が嵩じて行きました。

## 十

其の時分根岸に住でゐたお絹が、今日は小女を連れて何處の奥様か

といふ風をして山下を歩いて歸ります。

雁鍋の前へ來た時に、見たやうな人が其の店から出かけたのに氣が着きました。

男と女と二人で微酔機嫌で店を出かけたうちの男の方が東海道下りから甲州入りまでつき纏つて來たが、いりきの百藏に相違ないから、お絹は自分の面を隠さうとしました。

併し向ふは些とも氣が着かないで二人で笑ひながら話し合つて歩いて行きます、片腕の無い百藏は前と變らず元氣なもので、身なりなども小綺麗にしてゐるのでした、女はと見れば、これは眉を落した年増で中々美しい女でした。

お絹は其れを見ると、むら／＼と嫉ましくなりました。自分は何もが、んりきに惚てはゐない、東海道で附き纏はれた時も、内心では輕

蔑しながら調子を合せて来たが、男は中々しつこい、しつこいほど面白がつて翻弄氣取で一緒に来て、とうとう腕を一本落させることにしてしまつて、死ぬか生きるかでウン／＼唸つてゐるのを山の中へ置きばなしで逃げ出して、その時は、さすがに氣の毒と思はないでも無かつたが、思ひ出した時分には、柄にない男振して、わたしを張にかゝつた其の罰はあゝしたものと腹の中で笑つてゐる位でしたが、今其の男が斯うしてピン／＼してゐる上に、他し女と摺れつもつれつして歩く處を見ると、お絹は自分勝手な嫉みをはじめてしまひました。

「さう云ふわけなら、あの子をわたしが預かりませうよ」

それとも知らず男女の話は甘つたるいものでした。お絹の二葉は「其んな事は出来ねえ」

百藏は態とらしく首を振ります。

「そんなに、わたしといふ者に信用が置けないの」

「お前に預けて賣物にでもされた日には折角の生娘が臺無した」

「わたしは、またお前さんが預かつて食物にしやしないかと其れが心配だ」

「預かり物を食ふ奴があるものか」

「如何だかわかりやしない、猫に鯉節を預けたやうなものだから」

「第一、おれに食はれるやうな娘じやねえ、お郎奉行を勤めてゐた娘で堅いこと此の上無した、友達の義理で退引ならず預かつては見たものゝ、おれも實は心配なのだ」

「預けた方も心配でせう」

「心配といふのは其んな事じやねえが、何時までも俺の處へは置け

ねへわけがあるのだから、それで今日、よそへ預け換える約束をしてしまつたのだ」

「何處へ預けやうと云ふの」

「何處でも宜いじやねへか」

「それを言はないと放さない」

人目の薄いのをいゝ事にして二人は肩と肩とを突き合せて、此んな事を話しながら行くのを、お絹は皆んな聞いてしまつて、この男も女も憎らしくなりました。よし何處へ行くか、行く先を突き止めてやらうといふ氣になりました。

「詰まらなく嫉かれるのも嫌だから言つてしまはう、長者町の道庵といふ剽軽なお医者さんへ預ける事にしてしまつたんだ」

「長者町の道庵さん」

斯う云つて男女が山下の銀床といふ床屋へ入るのまでお絹はちやんと見届けてしまひました。

根岸の住居へ歸つてからお絹は異様の嫉ましさで惱まされました。惚てもゐない男だが、あゝなつて見ると何だか仕返しをしてやらなければ納まらなくなりました。

と云つて自分が男をこしらへて見せつけてやる程のことではない。何とかして一旦、自分の方に向いてゐた男の心をもう一ペン向き直させなければ女の面目が立たないやうに思ひました。一緒に歩いてゐた女は、ありや女房だらうか妾だらうかど餘計な詮索までして見たくありません。一體あの男が、徳間の山の中で抛り放しにして置かれてあつたのを助かつて出て來たのが不思議、誰が助けて來たのだらう、事によつたら山の中へあの女が通りかゝつて介抱した其れ

からの腐れ縁じやないか知らなごも考へて見ました。それはそれにしてあのおの女……

「あゝ、さうだ」

とうとう思ひ當つてお絹は小膝を丁と打ちました。あの女は慥か忠作の處へ金を借りに來た事のある女である、さうだ、甲州へ旅興行に出る仕込の爲といつて五十兩の融通を人を中に立て、借つて行つたのはあの女に違ひない、そんなら事によると自分が持つて來た品物の中に、あの書付が残つてゐるかも知れぬ、お絹は葛籠を明けて證文箱を取り出しました。お絹は末の見込のない事を知つて、自分の物は廻して置きました、大切の證文も幾通りか逸早く取り纏めて持つて出ました。

「有つた、これに違ひない」

と皺をのばした一通の證文は、一金五十兩也と書いて、女輕業太夫元かくといふ名前にしてあつたから、それであの女が、輕業師の興行人であり其の名前をかくといふ事までお絹は知ることが出來ました。斯うなつて見ると、お絹は其れや此れやを種に、二人をいぢめつけてやらなければ納まりません。

其の晩は寝ながらも此の仕組の事はかり考へてゐました。

先刻、耳に入れた話、何か預かり物の一件、生娘だとかお邸奉公だとか云つてゐたが、あれは何、それを種に使へまいか。さうして店へ入る時に云つたのは、長者町の道庵といふ瓢輕な醫者へ預ける事にしたといふ言葉。

よし、道庵が入るならば芝居が榮える。

其の翌日お絹は十二分の好奇心を以て長者町の道庵先生を訪れまし  
た。

「先生、今日伺つたのは外の事ではございませませんが、先生の身の上  
に有さうもない噂を聞きましたから其れで念の爲にお聞き申しに上  
りました」

「は、あ、モウあれを聞かれてしまつたか、それは〜」  
と云つて道庵は定まりの悪いやうな面をします。

「先生にもお似合なさらぬ事で……」

とお絹は何だか意味のありさうに云ふと道庵は恐縮して、

「ツイどうも彼んな事になつてしまつて甚だ申譯がない、わしも面  
白半分で出かけて行つて見ると、ワイ〜騒いでお粥を食つてゐる  
様子が餘まり宜いもんだからツイ大八車の上へ乗つかつて餘計な事

を喋べつてしまふと、皆んながまた馬鹿に嬉しがつてやんや〜と  
讚めるから少しばかり調子に乗つてしまつてゐるうちに騒ぎがだんだ  
ん大きくなるので、こいつは堪まらねへと、逃げ出すのも面倒だか  
ら車の上へグウ〜寝込んでしまつたやうなわけで、其れを如何間  
違へたか道庵が煽てたのだ、貧窮組を持上げたのは道庵の仕業だそ  
れでお前の家を荒したのも道庵が指圖をしたんだなんて、餘計な事  
を言ひ觸らす奴が有つたものだから、危なくお上の手にかゝつてこ  
の腕が後へ廻る處を、それでも永年、道庵で賣込んでゐるだけに、  
役人の方で取上げずに、道庵か道庵ならば道庵で宜しいテナ事にな  
つて無罪放免で済んだが、年甲斐もなく馬鹿な事をしたものだよ、  
全く以て申譯がない」

「先生、そんな事ではありません、わたしの聞いた噂といふのは別



な事ですよ』

「はて、其の外には、別に人に聞かれて後暗えやうな事をした覚えは無へのだが』

「先生が奥様をお迎へ申す様になつたと聞いてお祝に参りました』

「おや、わしが奥様を迎へる事になつたつて、そりや初耳だ、

さうして其りや何處から來るんだい』

「先生、慌けちや可けません、それだからワザ／＼お聞き申しに來たのですよ』

「そりや、おれの方からもお聞き申したい處だ、他の事と違つて此んな目出たい事は無い、何處から、どんなのが來るんだか早く聞かせて貰ひたい』

「先生が言はなければ、わたしの方で言つて見ませうか』

「是非、さういふ事にして貰ひたい、同じ値ならば若くつて綺麗な

方にしてもらひたいが、斯う年を老つて飲んだくれの俺だから、と

ても其んな贅澤な事は云へ無え、萬事お前さんの方に任せる』

「處が若くつて綺麗なのだから不思議ですね、その上にお邸奉公ま

でつとめて、遊藝の嗜みもあれば禮儀作法も心得てゐるといふのだ

から、如何したつて此れは先生に奢らせなければなりません』

「奢るゝさうなれば道庵も斯うして踏み倒されてばかりは居ねえ、

さうして何かい、親許は一體何處で何時來て呉るんだらう』

「親許は上野の山下で、もう結納の取り替せも済んで近々のうちに

お輿入れがあるさうじや有りませんか』

「親許は上野の山下だつて、さうして其れは武家か町人か、たゞし

また慈姑仲間が親許か、其の變も確かめて置きたい』

「山下の銀床といふ床屋が親許で近いうちに道庵先生のお邸へ乗込  
むといふ事を人の噂でチラリと聞きました」

「ハ、ア成程」

それと聞いて道庵先生が初めて気がつきました。この女何處から聞  
き出して来たか、もうあの娘の事を知つてゐる、さうしてワザとこ  
んな風に綾をかけて持ち出したのだなと思ひました。

それと共に道庵がフト考へついたのは、此の女も随分臍に持たない  
處はあるけれども、立ち入つて人の世話をして見たがつたり存外人  
を調戲つて見たりする處に、いくらか道庵と共通の處があつて心安  
くしてゐるから、女は女同志で、寧ろこの女に頼んだら如何だらう  
かと道庵は道庵なりに見當をつけた事件がありました。

「は、あ、あの娘の事か、何處から聞いて来たか知らねえが、お前

さんにさう云はれると、は、あ成程といふ外は無いのだ、實は俺も  
其の用談を持ちかけられて始末に困つたやうなわけだが、如何でこ  
ざいませう、お前さんの方で何とかお考へがございませうか」  
道庵は斯う云つてお絹に相談を持ちかけて見ると、お絹は二つ返事  
で其の娘を預からうと云ひ出しました。

道庵は其れでホツと息をついて、お絹を信用して百藏から頼まれた  
娘をそつくり其の方へ廻すことにしてしまひました。

娘を預けやうとする道庵も無論、その娘がお松であるとは知らず、  
それを預からうとするお絹も固よりそれは一旦自分の手鹽にかけた  
お松であらうとは思ひも及ばず、道庵は頼まれて見たものゝ小面例  
であるから其のまゝお絹に引き渡さうとし、お絹はたい、がんりき  
とお角の間に何か仕掛をしてやらうといふ、いたづら心で進んで其

れを引き取らうと云ひ出したものです。

斯う話が纏まつてお絹が道庵宅を辭して出やうとする時に玄關で、

「御免下さいまし」

薬籠持の國公が其の應接に出てゐると、

「山下の銀床から参りました……」

その聲は聞き覚えのある聲、即ちがんだりきの百藏の聲でした。

道庵は自身で玄關へ立ち出で、見ると其處に駕籠を釣らせて來たの

は、銀床の亭主擬ふ方なき元のがんだりきの百藏で

「これは先生、豫てお願い申したのを只今連れて参りました、何分

宜しく」

次の間で隙見をしてゐたお絹が、

「おや」

と云つて驚いたのは手を取つて駕籠から助け出したそれは自分が手  
鹽にかけたお松の姿であつたからであります。

次の間で隙見をしてゐたお絹が驚いたばかりでなく、迎ひに出た道  
庵も亦驚きました、お松に取つては道庵は再生の恩人であり、伊勢  
参りをした時に大湊で會つて奇遇を喜んだ事もありました。

これはくと云つて道庵もお松も直に打ち解けた事情を聞いて、連  
れて來たがんだりきも喜んで、なほ色々とお頼み申した上に無事に歸  
つてしまひました。

「お松ではないか」

お松は其の聲を聞いて水を掛けられたやうな心持がしました。其處  
に立つてゐるのは、姿こそ今は丸鬚の奥様風になつてゐるが、元自  
分を仕立て、呉れた鬼も角も恩人でありましたから

「まあお師匠さん」

頼には二の句が次げませんでした

「珍らしい處で會つたね」

「どうも御無沙汰を致して済みませぬ」

「見ればお前は何處ぞお邸奉公でもしておるでのやうだが、何處に勤めてゐました」

「はい、三田の蜂須賀様のお邸に」

「如何してお前、あの神尾様のお邸を出てしまつたの」

「つい據どころない事が出来まして、それ故まことに……」

「人もあらうに風呂番の與太郎とやらいふ足りない男と逃げたといふじやないか」

「如何も申譯がありませんね」

「お前があんな不始末をして呉れたお蔭で、わたしは殿様の前へ、どんなに辛い思ひをしたか知れやしない、ほんとに考へ無しな事をして呉れたね」

「何卒お免し下さいまし」

「出来てしまつた事は仕方がないが、もう其の與太郎といふ風呂番とは手が切れてしまつたのかい」

お絹が與太郎々々といふのは與八の事ですけれど、お絹の口ぶりによれば、お松と與八と逃げたのは不義をして逃げたもの、お松が其の風呂番に喉かされて逃げたものと思ひ込んでゐるらしいから、お松は、

「あの人が、よく親切にして呉れましたけれど、わたしが上方へやられたものですから……」

「何が親切なんだらう、色戀にも名聞といふものがあるのに、風呂番と逃げたんでは話にも何もなりやしない、ほんとうにわたしはあの時位情なく思つた事はありません」

「さういふ譯ではございませんぬ」

「それからお前、上方へも行つてゐたさうな、一度位わたしの處へ便りをして呉れても宜かりさうなもの」

「そのつもりで居りましたが、つい色々の目に遭つたものでございますから」

「此方へ来て其んなに御奉公するまでに何故わたしを訪ねて呉れなかつたの」

「まだ此方へ参りまして僅でございますからツイ御無沙汰を」

お松は曇みかけて叱られるのを苦しい受太刀をしてゐたが、お絹は

あんまり深く追及しないで、

「過ぎ去つた事は仕方が無いからこれから心を入れ更へて下さい、今お前を連れて来た人なんぞも如何やら性質の宜い人ではない容子引受けたのが當家の道庵さんや、わたし達だから宜かつたけれども一つ間違へば、お前の身は臺なし、ほんとうに危ない處」

お絹は自分の子を危ない所から助け出したやうな言葉で云つてゐますが、これは丸きり作り言ではなく多少の親身が籠つてゐるやうです。

## 十一

斯うして道庵の手からお松は再びお絹の許へうつる事になりました

た。お絹は以前の事を一通り叱言を云つて見たりしたけれどお松の詫方が餘り神妙でしたからお絹も和いで、

「お前が、さういふ氣になつて呉れれば、わたしだつて昔の事なんぞを繰返すのではありません」

「お師匠様、それに就ては一つのお願ひがございしますが、どうかお聞き入れなすつて戴きたうございます」

「改まつてお願ひといふのは、どんな事でせう、云つて御覽」

「お暇乞を致さずにお邸を出したのは、わたしの重い罪でございませうから、何卒もう一遍、神尾の殿様へ御奉公にお出し下さいませうして一生懸命に御奉公を仕直して、お師匠様の御恩報じを致したいと存じまする」

「成程」

お絹は本氣になつて成程と云ひました、それはお松の心が、あんまり正直だから多少動かされたのであります。

「けれどもね」

やゝしばらく感心してゐたお絹は、けれどもといふ言葉を挿んで斯う云ひました。

「お前は、まだ知るまいが、神尾様も昔の神尾様では無いのだよ、

今はお江戸にはおゐでにならないのですよ」

「あの甲府の方へお役替になつたさうでございませうね」

「まあよく知つてゐる」

お絹の眼には驚きの色がありました。

「甲府のやうな山の中へお出でになりましたは何かにつけて御不自由でございませうから出来ませうならば、お傍にゐて相當の御用を

勤めてお上げ申したいと存じまする』  
 前には忌やがつて逃げ出した神尾の殿様の處へ今度は進んで行かう  
 と言ひ出したのは、それだけ苦勞をして來た効だらうと思ひました  
 『ほんとにお前は感心な處へ氣が附きました。それは甲府詰といへ  
 ばお旗本の運の盡きであつて我儘をしておゐでなすつたゞけに、  
 今はどんなに苦勞をしておゐでなさるかと思へば、おいとし  
 くてなりませぬ、お前がさう云つて呉れるのが、わたしに取つては  
 親身のやうに嬉しい、御威勢のよい時は、随分忠義を盡す人も多か  
 つたのに、今は江戸からお手紙を差上げる人もない御容子。それを  
 お前が、自分から御奉公に上がらうと云つて呉れる心が嬉しい』  
 お絹は喜びました。お松は何も元の殿様に忠義を盡す心から云つた  
 のでは無かつたけれど、お絹はお松の初心な氣性を、たゞ律義一遍

にのみ受取つたから親身に嬉しく思つたのでした。さういふ風にす  
 べて善意に受取られる事は、お松の性質の一徳でありましたけれど  
 お絹も亦此の頃では、物に感じ易くなつてしまつたのです。さほご  
 でもない事を嫉ましく思つたり、其の仕返しの種類と思つて、圖らず  
 お松と逢つて見れば、其の言ふ事のしほらしさに一々感心してしま  
 うやうになつたのは、つい此の頃の事でありました。

『わたしはもう此れまでの體だから、これからお前を養女にして、  
 町人でいゝから堅さうな養子を見立て、小店の一軒も出すやうに  
 してお前の世話になつて疊の上で死ぬるやうになりたい』  
 なんぞと心細い事をも言ひ出すのでありました。今夜も亦二人は床  
 を並べて寢に就きましたが

『お師匠様、まだお手形は出ませんのでございませうか』

お絹は思ひ出したやうに、

「あゝ、もう下りさうなものですよ、けれどもお前も知つての通り女の手形といふものは中々手つゞきが面倒なのだから、それで此んなに延るのでせう、若しあんまり後れるやうならば、わたしがまた頼み込んで見る處があるから、もう二三日待つて御覽なさい」

「苦し、お手形が下がりがりませんでしたらば、わたしはお手形なしで裏道を通つても早く甲府へ参りたいと存じます」

「わたしの方はさうは行かないから、まあもう少し待つておゐで」お絹とお松との手形といふのは疑ひもなく甲府へ行かうとする其の道筋のお關所へ見せる女手形の事でありませう、それを願出て置いて、まだ下らないから二人で此んな噂をしてゐるのです。其の翌朝になると女中が、

「旦那様、お客様でございます、山下の床屋からと申しました」

と聞いて、お絹は其れと氣が附きました。

「まあ、お待ち、ごんな人が来たか見てやりませう」

お絹はワザ／＼自身に立つて玄關の襖の隙から表を見ると先日の方、がんだりきの百藏と睦まじさうに山下の雁鍋から出て来たお角で、

「何の御用ですか聞いて御覽、お門違ひではございませんかと尋ねて御覽」

それで女中が出て行きましたが、暫らく経つてまた引返し、

「旦那様へこのお手紙をお目にかけてさへすれば譯るからと申しました、お客様は女の方でございます」

一封の手紙を取次いだからお絹は其れを取つて見ると、長者町の道



庵先生からでありました。

封を切つて読んで見ると、其文面は兼てお預け申してあつた娘を此の手紙を持つた人が迎へに行くから渡してやつて呉れ、お禮には後で拙者が出るからといふことでありました。正しく道庵先生の筆に違ひないけれど、お絹はわざとらしく解せないやうな顔をして、クル〜と巻いてしまい、其れを女中に突き返すやうにして

「如何も、お手紙の筋は手前共の主人にはよく解り兼ねますからお返事の致しやうがございませんとさう云つて此の手紙を返してやつて御覽」

「畏まりました」

女中はまた出て行きました、何と云つて来るか知らんとお絹は煙草の煙を吹いて居りました。

「旦那様」

また〜取次の女中がやつて来ました。

「返つたかい」

「否え、お客様は、其んな筈は無いと申して居りまして、兎に角御主人様にお目にかゝつた上で、お門違ひならお門違ひのやうにお詫を致しますからと云つて動きませんのでございます」

「さうだらうと思つた、それではお通し申して置き、それから用筆筒の抽斗の二番目の悉皆引き出して此處へ持つて来て下さい」女中は先づ命せられた通りに用筆筒の抽斗をそつくり引抜いてお絹

の前へ持つて来てからまた取次に出かけました。

お絹は其抽斗の中を選び分けて一枚の借用證文を引き出しました。この證文は、お角が甲府へ旅興行に行く前に仕込み金として忠作か

ら借りて行つた金の證文であります

「お松や」

お絹は證文の鐵を伸ばしながらお松を呼びました。

「はい」

「わたしが今お客様と話をしてゐますから、若しお茶をと云つた時分に、お前はお茶を入れて持つて来て下さい、お客様は、お前の面を見るとき何か言ひ出すかも知れないが、お前は心配しないでお茶を出したら直ぐに奥へ入つておしまひ」  
斯う云つてお絹は取済まして客間へ立つて行きました。

「お初にお目にかゝりまして」

お絹とお角と兩女の挨拶があつてからお角が改めて

「先程お目にかかけましたお手紙、どうやらお門違ひとも思はれませぬのに、御容子がおわかりにならないさうでございましたから、押してお目通りをお願い申しました」

「道庵さんは始終懇意に致して居りますけれど、あの娘さんが如何した事やら文面が何の事やら飲み込めませんものですから」

「あの道庵先生から、當家様へ二三日お預かりを願ひました娘さんの事でございますが其の親許が今日見えまして、連れて歸りたいといふ事でございますから、早速道庵先生へお話しを致しますると、先生は當家様へお頼み申してあると仰有つて、おれが直に連れて来てやると御自身でお出かけになる處を何しろあの通り御酒を召してゐらしつて、お足元がお危なうございますから、それには及びませぬ、お手紙でも戴きますれば、私共の方からお迎へに上りますから

と申しますと先生が、よし／＼と仰有つて書いて下さつたのがあの  
お手紙でございます」

「それは變な事でございますね、私共では先生から娘さんとやらを  
預かつたやうな覚えは一向に有ませんのですが」

「おや／＼、それでは道庵先生が何か感違ひをなすつたのではござ  
いますまいか」

「あの先生の事だから、何かいたづらをしてお前さん達を欺いたの  
かも知れません」

「外の事と違ひまして人一人の事でございますから、そんな罪ない  
たづらをなさる先生でもございますまいし」

「何しろ、わたくし共では道庵先生から小猫一匹でもお預かり申し  
た覚えはございませんから」

「其れは困つた事になりました、あの先生に限つて酔つぱらつてお  
ゐでになつても信用の置ける事には置ける先生だとばかり思つて安  
心して上りましたのに」

「如何もお氣の毒に存じます、もう一度先生の方を確めてごらんな  
さいませ」

「左様いふ事に致しませう、これは如何も飛んだ失禮を致しました  
粗勿かしい事でお恥かしうございます、幾重にもお許し下さいまし」

お角は當惑してしまつたからお絹に向つて自分の粗勿を詫言しました、  
「まあ宜しうございます、お茶を一つ召し上げられ」

お絹がお茶を一つと云つた時に、何も知らないお松はお茶を立て、  
此の場へ持つて出ました、お角は今お詫をして歸らうとする處へお  
松が入つて來たものだから思はず其の面を凝と見て、

「おや、このお娘さんは……」

お角が驚いて膝を立て直すのを見て、お絹は莞爾りと笑ひました。

お松は何の事だかわかりませんでした。此の女のお客が自分を見て仰しい表情をしたことを少しくおかしく思ひながら、

「お出で遊ばせ」

一禮をして出て行かうとする時、お角の言葉つきがガラリと變つて

「奥様、おからかひなすつては可けませんよ、女の事でございますから怖えますよ」

膝を立て直したお角の舉動を益々怪しい事に思ひながらお松はお茶を出して、次の間へ立ち去つてしまへました。それを流し目でお角は見送りながら、

「奥様、お前様は女の子は愚か猫一匹も道庵先生からお預かり申し

た覚えは無いと仰有いましたね、そんな事だらうと思ひました。借ない事、子供の使ひで、追ひ返されて此方からは赤い舌を出され、向うでは笑ひ物にされる處でしたよ」

お角は座り込んで、ことわりも無しにお絹の煙管を借りて煙草を一本くつけた時に、お絹はさい前の證文を取り出しました。

「お前さんには、あの女の子より先にお預かり申した品があるか、其れをお返し申してからの話にしようと思ひました」

お絹は其の證文をお角の前に置くと、お角は不審な面をして煙管を投げ出し證文を取り上げて披いて見ました。

「おやく、こんな品物が奥様の方に廻つてゐやうとは存じませんでした。エ、宜しうございますも、お借申したものは決してお借申さないとは申しません、甲府へ行く前に此の證文通りお借申し

した、甲府から歸つて参りますと佐久間町の方へお返しに上つたんですけれど、お家が壊れておゐでなすつて、何處へお引越なすつたか近所で聞いてもわかりませんから、ツイ其れなりになつてしまつたんですよ、決して返さないつもりじやございませぬ、お借申したものはお借申したもので、それを斯うして不意にわたしの鼻先へ突きつけて下さるなんぞは御念が入過ぎましたね、あんまり御念が入つて御親切が難有過ぎるから、わたしの方でも少々御念を入れてから返して上げる事に致しませうよ』

「エ、何時でも宜うございませぬよ、このお預かりの方は何時でも歸して上げますが、あの娘の方は何遍取りにお出でなすつても無駄道でございませぬから、其の方はお断り申して置きますよ』

「おや、其れは如何いふわけでございませぬ、成程此の證文は口を

利きますけれど、あの娘さんは彼りや山下の床屋から道庵先生のお手を通して當家様へお預け申した人、いくら高利貸が御商賣でも誘拐まではなさるんじやございませぬね』

「氣を注げて口をお聞きなさい、誘拐とは其りや何の事です』

「誘拐が悪うございましたか、人の娘を預かりながら、其れを親許から受取りに来れば預からないの返せないのと、知らを切るのは其りや誘拐じや有りませぬか』

「幾ら淋しい根岸でも近所がありますから、當り前の聲で話をして下さいよ、お前さんは何も知らずに山下の床屋から尋ねておゐでなすつたやうだが、あの床屋といふのは一體此の娘の何に當るのですね、親許から迎ひに迎ひにと仰有るが、その親許といふのは如何な人なんだかそれがお聞き申したいね』

「その親許といふのは銀床の亭主の友達なんですよ、その人が今銀床に来てゐるんだから其れより確な事はございますまいよ」

「銀床の御亭主といふのは、何な人だかお前さんは御承知ですか」

「それや銀さんといつて、片腕がないけれど腕がいゝのであの邊で評判ですわね」

「その銀さんとやらが如何して片腕が無いんだか知つてゐますか」

「大きにお世話様ですわね、片腕が存らうと有るまいと、好い人は好い人なんですすからね」

「處があんまり好く無い人なんですよ、成程お前さんには片腕のない處がいゝかも知れないが、あんな物騒な人に娘盛りの子を預けては置けません」

「何が物騒なんでせう、人には親切で、錢金の切れつばなれば宜し

男振りだつて満更じや有りませんかからね、若し時喧嘩をして腕に怪

我をしてから切り落すやうになつたんだから、軍人の向ふ傷と同じ

で、男に取つては名聞な位なものですよ、わたしは彼の片腕が大好

きなのよ」

「おや、首の無い殿御を抱て寝るといふお姫様もあるんだから

片腕のない處もまた乙でせうけれど、あの男が片腕を無くしたわけ

を聞いてしまつたら、お前さんが三年の戀も冷るでせう、何も知ら

ないであんな男に頼まれておゐでなすつたお前さんがお氣の毒」

「其んな事を聞きに上つたんじや有りません、あの人の片腕が如何

しやうと其んな事は大きなお世話じやありませんか」

お角は非常に腹を立てました。自分に恥を掻かせやうと企んでするらしい此の女の仕打が憎らしくて堪まらなくなりました。斯うなつ

ては腕づくでも、お松を連れて歸らねば承知が出来なくなつたから  
 「何を云つてやがるんだい、誘拐奴、愚圖々々云はずに娘をお出し  
 よ、出さないで爲にならないよ」  
 斯う云つて太返りました、近所隣へ聞えるやうな大きな聲で罵りま  
 した。

「いゝえ、歸すことは出来ません、何ですお前さん、人の家へ来て  
 失禮な、其の容装は、さあ早く歸つて下さい、お歸りなさい」  
 お絹も負けてはゐませんでした。

「失禮は持前ですからね、とてもお前さんの様にお上品な面をして  
 人の娘を誘拐すやうな事は出来ませんよ、わたしに失禮な真似をし  
 て貰ひたくなければ娘をお出し、大きな聲をされるのが忌だと思つ  
 たら預けて置いたお嬢さんを出してお仕舞ひ、愚圖々々云つてると

腕づくだよ、わたしはお前さんに嘔り着くよ」

「勝手になさい、わたしの體に指でも差してごらん、わたしも只は  
 置かないが此の近所には、わたしの知合で公方様の兵隊を指圖をす  
 る重い役人も居るんだからお前さんの爲めになりませんよ」

「面白いね、御家人が居たら出て貰はうじやありませんか、公方様  
 の兵隊を指圖なざる重いお役人がおゐでなすつたら其の兵隊を繰出  
 して貰はうじやありませんか、筋道を立て、お嬢さんを受取りに來  
 る人と、企みをして誘拐をしようといふ人と、何方が白いか黒いか  
 さういふお方に見て貰はうじやありませんか」

「お前さんのやうな下品な人とは口を利くのも否、勝手に一人で喋  
 べつておゐるで」

お絹は座を立つて、次の間へ行つて、しまはうとする、お角は嚇ど

怒りました。

『下品で悪かつたね、ごうせ、わたしなんぞは下品で失體で阿婆指でお丹珍ですから、自棄になつたら何をするか知れたものじやありませんよ』

お絹の後から飛びついて引き戻さうとしました。

『何をするんです』

お絹は其れを突き返しました。

『さあ娘を返せ、お嬢さんを此れへお出しなさい』

お角は突き放されてまた武者振つく、それをお絹は突き返す。

『まあ、何をなさるんです、ごさいます、何卒お静かにお師匠様もお静かにお神さんも手荒いことをなさらずに』  
次の間にゐたお松は見兼ねて其處へ仲裁に入れました。

『お、お嬢さん、わたしは銀床から頼まれてお前さんを迎へに来たんですよ、お前さんの伯父さんが今甲州の方から歸つて、お前さんを連れて歸りたいといふから、わたしが道庵さんまで迎へに行くと此方へ上つてゐると云ふから、わざ／＼此處まで来て見ると此の人が妙な真似をするから、わたしは腕づくでもお前さんをお連れ申すつもりなんでございます、さあ此んな忌やな處におゐるでなさらずに、わたしと一緒に歸りなさいまし』

お角は仲裁に出たお松の手を引張りました、お絹は其の間へ割つて入り、

『お前さん方のやうな悪者の仲間へ此の子を渡す事はなりません』

『おや、悪者の仲間とはよく言つた』

お角はいよく荒れます。お絹は少しも萎みません。お松が持て餘



してゐる處へ折よく

「まあくくく」

かねて容子を見てゐたものゝやうに飛び込んで来たのは七兵衛でありました。

## 十二

七兵衛のこの場へ飛び込んだことはすべてに於て都合がよくなりました。

二人の女を旨く仲裁して、話をそつくりわかるやうにしてお角を和めて歸し、そのあとでお絹と萬事話し會つて事情がわかり話を纏めて置いて七兵衛は山下の銀床へ歸りました。

「百、今歸つた」

「兄貴、歸つたのか、俺が今出かけやうと思つてゐた處だ」

「何處へ」

「根岸の後家さんとやらがオカしな真似をするといふから行つて見やうと思つてゐた處なんだ」

「それなら、モウ話が纏まつたから廢せ」

「兄貴の方は話が纏まつたか知れねえが俺の腹には些とばかり居ねえ事があるんだ」

「あれはあの女の癖だから別に氣に掛けなさんな」

「癖にしては餘まり性質が良くねえやうだ、何か此方に鬱みがあつてするやうな乙な真似をしやがる」

「はゝゝ、恨みは大有りだ、當つて見れば因縁がちやんと附いてる」

「一體其女といふのは何者だい」

「お前が其の女に悪戯をされるのはされるやうな因縁がついてゐるんだから仕方が無え、ちよつと調戯にやつて見たんだから、根に持つなよ」

「さう聞いて見ると猶更打捨つちや置けねえ」

「出かけて行つて如何するつもりだ、其の女に指でも差して貰うと俺が困ることになるんだから打捨つて置いて呉れ」

「兄貴の迷惑になるやうじやあ濟まねえが何だか容子が解らねえから、まあ一通りの話を話して見て呉れ」

「根岸にある女といふのは其りやあそれ徳間峠の一件物だ」

「ナニ、徳間峠の……まさかあの切髪の新造じやあるめえな」

「それだ、お前が腕を一本取られた因縁物だ」

「成程、其奴は廻り合せが奇妙だ其女なら因縁は此方から附けてやらにやあならねえ」

「處が向うから因縁をつけて来たといふのは百、お前が氣が多いからだ、あの女輕業の親方とお前と出来て嬉しさうに歩いてゐる處を見せつけられたから嫉て堪まらねえので、そんな悪戯をして腹煮をして見たんだ、早く云へば百、お前が色男過ぎるから調戯はれたんだ、こゝは腹を立てねえで一杯奢る處だよ」

「うむ、さう云はれると何だか揶ぐつてえやうな氣持もするが、浮氣で云うんじやあ無え、あの女はあんまり薄情過ぎる」

「は、と」

七兵衛は笑つてゐるが、がんだりきはまだ心の底に何か残つてゐるらしい。

「兄貴の前だが、おれは一旦物にしかけた女を、其のまゝにして置くのは忌やだ」

「おやく、お前はまた其んな事を言つてるのか、男らしくも無えまだ未練が残つてゐたのかい」

「未練といふわけじやあ無えが、おれもあの女故に此の腕を一本亡くして、生れもつかねえ片輪にされちまつたんだ、身から出た錆だと云へば其れまでだが、如何も此のまゝじやあ済まされねえ」

「済まされなけりやあ如何するつもりだ、腕一本で済んだのが見つけ物で、すんでに命の無え所を助かつたんだ、餘計なチヨツカイを出したお釣と思へば腕一本は安いもんだと諦めてゐた癖に今になつて済まされねえとは如何するつもりだ」

「兄貴、あきらめといふのは見ず聞かすの上の事だ、ツイ目と鼻の

先にあて、こんな悪戯をされた日にやあ、如何もがんだりきも眼がつ

ぶり切れねえ」

「存外、手前も男がケチだ、向うは一寸調戲つたゞけの御挨拶で、女といふ奴は、あゝもして見ないとバツが悪いんだ、可愛い位のもんじやねえか」

「其處が兄貴と俺との性根が違ふ處なんだ、ケチな野郎ならケチな野郎でいゝから、俺は俺の思ふやうにして見てえ」

「それじや何か、執念深く何處までも彼の女を附け廻さうと云ふんだな」

「左様だ、美ん事、俺はこの片腕であの女を此方のものにして見せる兄貴の方に何か差會があるかは知らねえが、お前も苦勞人だから一番俺の男を立てさせて呉れ」

「百、お前が左様いふ心がけなら其れでいゝから思ふやうにやつて見ろ、其の代りあんまり出過ぎると、ちい一つと危ねえ事があるから、さう思へ」

「合點だ、この道危ねえ橋は渡りつけてるんだから、地道を歩くのが馬鹿々々しい位なもんだ」

「うむさうか、それじゃあ、彼の女は近いうちに娘を連れて甲州街道を上つて甲府へ行く筈だから、手前も一緒に行つて見たら宜からう、其の途中には手前が望む危ねえ橋が幾つも有るんだから渡れるものなら渡つて見ねえ」

「兄貴、お前もついて行くんだらう」

「俺が頼んで行つて貰うやうな仕事だから、道中は眼が放されねえ」

「さうなるぞ兄貴と俺と橋を突くやうなものだ、兄貴を向うに廻

して、俺が色悪を買つて出るやうなものだ」

「まあ宜いやうにして見ろ」

七兵衛どがなりきとは此んな問答をして、少しばかりお互に氣まづい色を見せて七兵衛は此の銀床を立ち出でました。

「困つた野郎だ、何をしやうと多寡の知れたやうなものだが、詰らねえ事にしたくも無え、何とかして彼奴を追拂つてしまふやうな工夫は無えものか」

七兵衛は考へながら歩きまゐりましたが

「さうだ、女から持ち上つた事は女に限る、一番あの女輕業のお角といふ女を焚附けて嫉かしてやらう、さうしてがなりきの胸倉を取捉まへて、やいのゝを定めさして、動きの取れねえやうにして置けば、此方も道中餘計な心配が無くつていゝ、こいつは宜い處

へ氣が附いた、あの女の居る處は兩國の小屋で直ぐわかるだらう、これから行つて、罪なやうだが狂言を書いて見る、いやはや彼方でも此方でも野呂松人形を操るやうな真似ばかり、おれも釣り込まれていゝ加減の狂言師になつたわい』

## 十三

宇治市田の米友は此の頃お君の身の上を心配してゐます。兩國の木賃宿で別れてから時々便りのある筈なのが更にありません。自分は程遠からぬ箱物の家に留守番をしてゐる事だから毎日のやうに宿まで通つてお君の便りを聞かうとするが、さつぱり何とも云つて寄越しません。

あゝいふわけで米友は、兩國の見世物小屋を追出されてから兩國の近邊へは立ち廻れないわけなのですが、こつそりと出入をして若しお君らしい人が通りはしないかと思つてキョロ／＼見てゐましたが一向それらしい女の子は見えないから、いつでも失望して歸ります。米友の身體は小兵な上に脊が低いことは申すまでもありませんが肉附だとして尋常の人よりは少し瘦てゐる位ですから夜なんぞは誰でも皆んな子供だと思つてゐます。米友が一人で留守番をしてゐると近所の子供が寄つて来て、

「お前も一緒に遊ばないか」

と云ひましたが、

「やあ、この人は子供じやあ無えんだ、大人だよ。おちさんだよ」  
それで近所の子供等は米友をおちさんといふやうになりました。

「叔父さんは槍が上手なんだね」

と云つて槍をいぢくる。

「そりや上手さ、この間は侍の泥棒が十人も来たんだけれど、お

ちさんが此の槍一本で追拂つたんだね、おちさん」

「おちさんは脊が低いねえ、俺等と同じ位だねえ、如何して其んな

に低いんだらう」

「其りやお前生つれきだから仕方が無いじやないか、脊が低くつた

つてお前、おちさんの面を御覽、皺が寄つてるじやないか、だから

年を考つてるんだよ」

「それにおちさんは跛足だねえ、如何して跛足になつたの馬に蹴ら

れたんじやないの」

子供は正直だから答つて、鑿つて米友の身體の棚卸をしてしまひます

米友もさすがに苦い顔をしてゐますが、子供の事だから笑つてゐる

より外はないのを子供はいゝ氣になつて米友の脊中へ乗かゝつたり

膝を枕にしたりして

「跛足だつて槍は使へるんだよ、ほら此の間兩國へ来た印度人の黒

ん坊を御覽、あの黒ん坊も跛足だらう、それでも槍を使はせると素

敵だつたせ、金ちやんお前、あの黒ん坊を見たかい」

「見なかつたよ」

「話せねえな、印度で虎を退治して来た黒ん坊なんだよ、俺等はお

父さんに伴れて行つて貰つたんだ随分怖い槍の使ひ方をして見せた

よ」

米友は、いよく苦い面をしてゐると子供は頓着なしに、

「それがお前、途中でふいと居なくなつちまつたから、もう一べん

見に行くつもりだつたけれど詰らねえや、でも此の頃また朝鮮から象使ひが来るんだとさ」

「何處へかゝるんだい」

「前に印度人の槍使ひが出たあの輕業の小屋さ、娘輕業といふのがあつたらう、あれが朝鮮まで行つて歸つて来たんだとさ、それで朝鮮から象使ひを伴れて来て來月から彼處へかゝるんだつて、だから俺等はまたお父さんに伴れて行つて貰うんだ」

「俺等も伴れて行つて貰はうや」

子供達の此んな話を米友が聞咎めました。

「子供衆」

「何だ、おちさん」

「朝鮮から象使ひが来るといふのは、あの何かい、元女輕業や力持

がゐたあの見世物小屋かい」

「さうだよ、もうピラが方々へ廻つてゐるよ」

「それで元あの小屋にゐた輕業や力持も歸つて来たのかい」

「皆んな歸つて来たよ、久々にてお目見えお馴染の一座なんて書いてあるよ」

「さうか」

米友は腕を組んで考へ込みました。甲府へ旅興行に出かけたにしては可なり日數がかゝつてゐたが、序に處々の旅興行をして歸つて来たものだらう。歸つて来たとすれば何よりも先にお君からの便りが無ければならぬ、友さん今歸つたよと云つてお君が眞先に此の米友を尋ねなければならぬのだ、つゞいてムク犬も尾を振つて咽喉を鳴らして跟いて來なければならぬ筈なのだ、それにもうピラも出

来て諸方へ廻つてゐるといふのに自分の處へ音沙汰がない、お君は此の米友を忘れてしまつたのか、あんな仲間へ入つてゐるうちに氣象が變つて俺等の事なんぞは如何でもいゝ事にしてしまつたんぢやあるまいか、ごうも訝しい、米友は單純な頭を色々に捻つて見たけれど結局、米友の智慧では如何しても其の間の消息がわからないから、これは直に行つて掛け合つて見るより外はないと思案を固めました。

併し乍ら米友には彼の小屋へ行けないわけがある。見せ物小屋の掟で、あんな事をしてブチ壊しをやつた藝人は、見世物師の背後にいてゐる破落戸が寄つて集つて手酷い制裁を加へて追出すのであつたが、米友のは全く無邪氣でやつた失策であり且槍の名人と來てゐるから荒つばい事をせず單に追放だけで済みました。それを今ノ

ソ／＼とあの小屋の附近へ近寄らうものなら、ドンな目に遭ふか知れない、兩國廣小路は米友に取つて鬼門であるけれど、今は其危険を冒しても米友は其處へ行かねばならなくなりました。

「おちさん、何處へ行くの」

「うむ、俺等は廣小路まで行つて來る」

と云つて米友は急に蹴足を引すつて此の家を出かけました。

「今日は」

もう開場三日前、小屋の内外の裝飾で忙しい處へ米友はやつて來ました。

木戸番は怪訝な面をして米友の面を見てゐると米友は、

「輕業の娘達は皆んな甲州から歸つたのかね、一人残らず歸つて來たのかね」



「はい皆んな歸りましたよ」

「では君ちゃんも歸つたんだらう君ちゃんが歸つたなら、ちよつと此處まで面を出して貰ひてえ」

「お前さんは誰方でございます」

「君ちゃんに合へばわかるんだ」

「此んな人が尋ねて來たつて君ちゃんに左様云つてお呉れ」  
木戸番は米友の面をよく見ました

「今此方の方は忙しいんですから手が放されません、裏から廻つて樂屋の方へ行つて御覽なさいまし、樂屋でお聞きなすつて見て御覽なさいまし」

「さうですか、其れじや樂屋の方へ廻つて見るかな」  
米友は久しぶりで此の小屋の内部へ入つて見ました。

大勢の人は氣が附かないで立ち働いてゐるが、米友は何だか氣が咎めるやうな心持で、勝手知つたる樂屋の處まで來て恐るゝ、言葉をかけました。

「今日は」

樂屋では一座の美人連が出揃つて新興行にかゝる小手調べをしてゐる處でした。

「今日は」

米友は女輕業の美人連の稽古場を覗き込みました。

「誰方」

「おや〜米友さんじゃないか」

「まあ、米友さんが來たよ、可愛らしい米友さんだよ」

美人連は稽古をしたりお化粧をしたりしてゐる手を休めて米友の方

を見ました、米友は怖ろしく、

「皆さん、暫らく」

「米友さん、ほんとに暫らくだつたね、何處に如何してゐたの」

「彼方の方に居たんだ、皆さんは何時歸つたんだい」

「わたし達は此の間歸つたのよ、まあお上り」

「上つちや悪からう、親方は居ねえのかい」

米友は樂屋の中を見廻しましたけれど、不幸にして、お君の姿は見  
えませんでした、土間を見たけれどもムクの姿をさへ見ることが出  
来ませんでした。

「親方は、ちよつと其處まで用達しに行つたから、もう直に歸るだ  
らう」

「あの……あの、君ちやんは居ねえのか」

「君ちやん……」

と云つて、美人連は面を見合せました。

「君ちやんも旅から一緒に歸つたんだらう、何處に居るんだい」

米友は、美人連が見合せた面をキョロ／＼と見てゐました。

「君ちやんはねへ……君ちやんは歸らないんだよ」

「おや、君ちやんは歸らないんだつて、皆なが斯うして面を揃へて  
ゐるのに、君ちやんだけが歸らないのかい」

「え、君ちやんだけが歸らないんだよ」

「其りや如何したわけなんだい、君ちやん一人を置いてけ抛りにし  
て來たのかい、そんな譯じやあるめえ」

米友がお君の安否を氣遣う容子があんまり熱心であつたから、美人  
連は可笑がつて、つい冗談を云つてやる氣になりました。

「米友さん、君ちやんは旅先で、いゝ旦那が出来たから其れで歸るのが忌になつたのだよ」

「いゝ旦那が出来たつて」

「わたし達なんぞは何れも此んな御面相だから誰もかまつて呉れる人は無いけれど、君ちやんは容貌よしだから忽ち旦那が附いちまつたんだよ」

「其んな筈はあるめへ、其りや嘘だ」

米友は、いよ／＼一心になりました、一心になればなるほど其の態度が滑稽になりますから、人の悪い美人連は、そんなに悪い氣分ではないけれど、つい／＼からかひが悪くなつて行きます。

「第一此處に君ちやんの居ないのが何よりの證據じやないか、ほんとにあの人は仕合せ者だよ、甲府の御城内でお歴々のお方を擒にし

て今は玉の輿といふ身分で太した出世なのに、わたし達なんぞは何時までも此んな稼業をしてゐなけりやならない、ほんとに君ちやんを思ふと羨ましくて堪らない」

口から出まかせに此んな事を云ひましたのを米友は、其んな事は無いと思ひながらツイ／＼釣り込まれて、

「ナニ君ちやんが俺等に相談なしで、そんな事をするもんか、俺等がちやんと附いてるんだ」

ウカ／＼と米友が斯う云つたのが美人連の笑ひを買ひました。

「ホ、、、左様でしたねへ、君ちやんには米友さんが附いてゐるんでしたねへ、こんな色男を捨て君ちやんも罪な事をしたものさ」  
彼等は辛辣な輕侮を米友の上に加へました。

女輕業の美人連は輿に乗つて米友に毒口を利きました。こんな毒口

は樂屋中で言ひ古されてゐる毒口でしたけれども、單純な米友は嚇と怒りました。

「馬鹿にするない、其んな了簡で言つたんじやあ無えぞ」

「米友さん、怒つちやあ可けないねへ、君ちやんに捨られたと思つて其んなに自棄を起しちや可けないよ」

「馬鹿」

米友は眼をクル／＼と剝いて美人連を見廻しました。

「君ちやんは俺等と約束がしてあるんだ、約束を破るのは女郎と同じことなんだ、君ちやんは俺等と約束を破つて一人で残つてゐるやうな女じや無えんだ、それを残して來たのはお前達が悪いんだ」

「手が着けられないね、米友さんお前が君ちやんと何んな約束をしたか知らないが、現に君ちやんは此處にゐないで、江戸へ歸るより

甲府がいと云つて残つてゐるから文句がないじやないか」

「お前達が残して來たんだ」

「馬鹿におしでないよ、斯うして座を組んで一つ鍋の御飯をいたゞいて歩いてゐれば姉妹同様じやないか、離れやうといつたつて離れられるわけじやない、それに君ちやんは花形だから親方の方でも離すことじやありません、それを振切つて行く位なんだから仕合せ者だよ」

美人連は此んな事を言つて米友を口惜しがらせました。

「本當の事を言つて呉れよう、本當の事を」

米友は焦れて歎願するやうに言ひました。

「本當の事はね……本當の事は、やつぱり君ちやんだけは旅から歸つてゐないんだよ」

「本當に歸らないんだね」

「それは本當だよ」

「よし、其れじや俺等が其の甲府といふ處へ行く、さうして君ちやんに會つて話をして見りやわかる事なんだ、甲府は何といふ處で何といふ人の家にゐるんだ、其れを教へて呉れ」

米友は斯う云つて焦き込んだけれど、女輕業の美人連はそれほどに行き詰まつてはゐないから、

「まあ、ゆつくりと旅の話をして上げるから上つて休んでおるでお茶を入れるから」

これ等の美人連も一蓮寺では、お君ごムクのお蔭で危ない處を救はれてゐるのだから、それを思へばお君の爲にも米友の爲にも、もつと親切に身を入れて應待をしてやらなければならぬのですけれど

米友を餘まり軽く見てゐるからツイ身が入らないのでした。

「ちよッ」

米友は、モドかしさに舌を鳴らして氣がいよく焦立ちました。

「だから旅へ出るのをよせと云つたんだ、それを聞かないで出たから悪いんよ、ムクだつてさうだ、何んとか役に立ちさうなものやねへか、ちよッ」

米友が舌を鳴らして立つてゐる處へ、お角が歸つて來ました。

「親方がお歸り」

と云つて、美人連の迎へを受けて樂屋へ入つて來たお角が米友を見ると、眼に角を立て、

「おや、見慣れない人が來てゐるよ、誰かゐないの、なぜあんな人を此處へ通したんだらう、こゝへ通して都合のいゝ人だか悪い人だ

か譯りさうなものぢやないか、あんな人が小屋の廻りにウロ／＼してゐて人氣に觸らないと思ふのがお目出度いね、ほんとに氣の利かない奴等だ」

お角の機嫌が大へんに悪い、美人連のうちの一人在米友の傍に寄つて来て、

「お前さん、早くお返り、親方に怒られると大變だから」

## 十四

輕侮と冷淡の限りを浴びせられて米友は悲憤を怵へながら此の小屋を出て來ました。殊に親方のお角は如何いふ蟲の居所か頭ごなしに米友を罵つて、水を浴びせかけないばかりにして米友を追ひ出させ

てしまひました。

いつもの米友ならば我慢しきれない處でしたけれども、感心に深く争はずして此の小屋を出たのは日の暮れる時分でありました。

さすがの米友も此の時は、實に口惜しかつたと見えて兩國橋の真中に來た時分に立ち止まつて橋の欄干から下を覗きながら口惜し涙をハラ／＼と落しました。

いくら自分が粗忽で黒ん坊を失敗つたからと云つて、折角聞きに行つたのだから、一通りの消息位は知らせて呉ても宜かりさうなものを、あゝして寄つて集つて冷かした上に、ガミ／＼と突き出してしまふ事は、いくら稼業柄とは云ひながら薄情な奴等だと其れで口惜しくて堪りませんでした。

「腹が立つて堪らねへ」

米友は齒齧みをして兩國廣小路見世の小屋の方を睨めました。

「覚えてやがれ」

米友の面に殺氣が浮びました。廣小路の見世物小屋の方を睨んで

「覚えてやがれ」

米友は遂に殺氣を含んで橋の真中から相生町の方へ歩き出すと

「もし、兄さん」

と肩を叩いたものがあります。

「誰だ」

米友が振り返つて見ると七兵衛でありました、元より米友は七兵衛を知らないが、七兵衛は米友に見覚えがあります。

「兄さん、お前さんは此れから何處へおゐでなさるのだ」

「何處へ行つたつていゝじやねえか」

「先から此處で見ているとお前さんは何か心配がお有りなさるやうだ」

「大きにお世話だ」

米友は七兵衛の面を睨みました。

「私は通りかゝりの者だが、如何やらお前さんの姿に見覚えがあるから、失禮な事だが暫らく立つて見てみました、さうするとお前さんが頻りに何か云つて腹を立つておゐでなさるやうだから、もしも變な氣を起して洵然とおやりなさるのかと思つて斯うして兩手を出して見てみましたよ」

「大きにお世話じやねえか、川へ飛ばうと首を縊らうとお前達の世話にやならねへ」

米友は愚憤の思ひで一杯ですから何を云つても耳に入らなせん。

「兄さん、若しお金にでも困るやうな事があつたら、随分力になつて上げやうじやないか」

「大きにお世話だと云ふに、何時お前に俺等が金を借りたいと云つたい」

「左様ガミ／＼出られちやあ、折角親切に話をして上げてても何にもならない」

「俺等はお前に親切をして呉れると云つた覺えは無え」

「でも、斯うして身投げでもしやうと云ふには、よく／＼の事があるんでせう、御主人のお金を遣ひ込んだとか、身の振り方に困つたとか、何かよく／＼の事があるから、そんな無分別な考へを起すんだらう、それを通りかゝつて見れば、見す／＼見捨てゝ行くのは、人情として出来ない事だから其れで大きにお世話だが、言葉をかけ

て見る氣になりました」

「何時、俺等が身投げをするよと云つたい、お前、俺等が此處に居たつて、身投げをするつもりで此處にゐるんだか、また別に何か考へてゐるだか、人の心持がよくわかるね、お前の方で身投げをするやうに見たつて、俺等の方では身投げなんぞをする氣じやあ無えんだ」  
「兄さん、其んな事を言つて強がりと言つて見た處で、容子でわかりますよ、容子で、他から見るとお前さんの容子といふものが餘ほど變で、口惜し紛れに身投げをするか人殺をするか、その思案に暮れてゐるやうな鹽梅に見えますから、其れで私は見すごしが出来ないわけなんでございます」

「嘘を云ふない」

「嘘なもんですか、第一お前さんは伊勢の國から遙々出ておゐるな



すつて、今晚泊る處もないから其れで死ぬ氣におんなすつたのだらう」

「何だ、お前は俺等が伊勢の國から出て来た事を知つてるのかい」

「知つてゐますとも、伊勢の國で宇治山田の米友さんといふのはお前さんだらう」

「おや、俺等の處から名前まで知つてやがる、俺等の方ではお前を知らねへ」

「それで兄さん、お前は盜賊の罪を被て、あの尾上山といふのから突き落されて死んだ筈だが、それが生き返つて今兩國橋の上に立つてゐるんだから、私は驚きましたよ、幽霊かと思ひましたよ」

「おや、お前は其んな事まで知つてるのか」  
米友は不安と怪訝と交々七兵衛の面を見返しました。

「心配しなくつても宜うございます、お前さんの罪の無いことは私がよく知つてゐるのでございますからね」

「うむ、俺等には全く罪が無へんだ、盗人は外にあるんだ」

「左様でせうとも、お前さんは盗人なんぞをなさるやうな方ではない」

七兵衛の信用を得て、米友はやゝ安んじた形でありました。

「俺等もあれから随分運が悪くなり通しでね、中々苦勞をしたよ」

「其りやお氣の毒でしたねへ」

「彼方へ行つても此方へ行つても馬鹿にされるんで遣り切れねへ」  
今までの突慳貪に引き換へて訴へるやうな聲で云ひ出したから七兵衛も可笑しくもなり可哀相にもなりました。

「私もお前さんの噂を聞いて、ほんとにお氣の毒で堪まらないから

何處かで逢つたら色々お話を上げてあげやうと思つてゐた處でした今日  
日はまあ宜い處で會ひました」

七兵衛と米友とは何方が先といふ事無しに兩國橋を本所の方へ向いて渡りながらの身の上話。

## 十五

七兵衛に焚きつけられたお角は案の如の口惜しがつてしまひました。百藏は此の頃、さる後家さんの處へ出入りするやうになつて、その後家さんが近いうち甲州へ出かけるに就て百藏も其の跡を追つて甲州へ行くから氣をつけなければならぬと七兵衛はお角を嗾しかけました。その上右の後家さんといふのは根岸に住んでゐて先日

お前さんの前へワザと古證文を突きつけたりなんぞした女だと云ふことを聞かされると勝氣のお角は矢も楯もたまらないほどに逆上しました。

「あんな女にこの上馬鹿にされて堪まるものか」

お角は小屋へ歸つて其の腹癢せに折角來會せてゐた米友を散々に罵しつて其の足でまた山下の銀床へ飛んで行きました。さうして百藏の胸倉を取つて思ふ存分に文句を云ひました、さすがの角が、りきも此れには閉口して、頻りに申譯をして見たけれどお角は耳にも入れないから、結局が、りきが、りきがお角の前に謝罪つて、やつと其の場を、りきませたけれど、それからお角は、りき家の家に入浸りて其の傍に附きつきりといふ事になつてしまひました。何か云へば及物三味でもし兼ねない勢であつたから、りきも全く閉口して當分外出も

出来ない事になつてしまひました。

七兵衛は其の有様を見て手を拍つて自分の策略が當つた事を喜び、その間に手形が下りて、お絹とお松とはがんりきを出し抜いて甲州街道への旅路に出かけました。七兵衛は自分が見え隠れに此の女連を守護して行くつもりであつたけれど、幸に甚だ都合のよい従者を一人発見しました。其の従者といふのは即ち宇治山田の米友であります。お君が甲州へ一人残されたことの真相を七兵衛を通してお角から聞いて貰つた處が、女輕業の美人連から冷かされた時のやうに宜い旦那が出来たから甲府へ残つたわけではなく、全く火事の爲に行衛不明になつたのだとわかつて米友はお君の事が心配になつて遙々甲州まで行つて見る氣になりました。蹴足でこそあるけれども米友は杖をついて飛んで歩けば、當り前の

人には負けない速力で歩くことが出来ます。それで乗物で行く足駄の件には結構役がつかまると、それは槍を取つても取らなくても生れついで俊敏で氣が早いこと無類で、氣が早くて直ぐに喧嘩を買つたり賣つたりする。これは人氣の悪い郡内あたりを通らすには善し悪しであるけれども、そこはよく七兵衛が意見をして置きました。

「兄さん、道中は無暗に人と物争ひをしちやあ可けねへせ、甲州街道の郡内といふところは人氣が悪い處だから女連と見たら雲助共が因縁をつけるだらうけれど、酒手をドシ／＼呉てやりさへすりや多愛なく納まるんだから、お前の一本調子で相手になつちやあ可けねへよ」

「うむ、可いとも」

「さうかと云つて、丸つきり温和しくしてゐると悪い奴に馬鹿にさ

れるから、時々は威勢を見せつけてやらなくつちやあ可けねへ、殊に此の街道にはがんだりきと云つて一本腕で名代の胡麻の蠅が居るから、何でも一本腕の男が傍へ寄つて來たらウント嚇かしてやるがい

「うむ、一本腕の胡麻の蠅が來たら用心するんだな、何と云つたけな、その胡麻の蠅の名前は」

「がんだりきといふ渾名がついてるんだ、ちよつと色の白い小作りな綺麗な男だ、其奴が駕籠の傍へ寄つて來たら用心をしなくちや可けねへ、夜の宿屋なんぞも他に怖いものは無へが其の一本腕だけは油断をしちやあならねへから確かり頼むよ」

「うむ、宜いとも」

「おれは道中師だから街道筋に如何な悪い奴があるかといふ事はチ

ヤンと心得てゐるんだが、恐らく其のがんだりきといふ奴位悪い奴は無へ、またあの位スパシツコイ奴も無へ、別けて女連と見た日には執念深く附いて廻つて仕事をする奴なんだから、其のつもりで確かり頼むよ」

老兵衛は米友に向つて、なほ委しくがんだりきの人相や悪事の手並を語つて、それに多くの敵意と注意を吹き込んで置きました。お絹とお松には正式の手形、米友は其の従者として正當に關所を越えることの出来るやうに手續が出来ました。箱惣の家にある時分に隙にまかせて米友は自分で工夫して、自分が名をつけた杖槍。槍の穂だけを取り外して込の處を摺上げ、それを何時でも柄の中へ締め込む事が出来るやうにして、穂を懐中に入れて置き、柄は杖にしてついて歩き、いざといふ場合には、それを仕込んで咄嗟の間に槍

にしてしまふといふ武器が出来たから米友は其れを持って、頭には笠をかぶり首根ツ子へ風呂敷包を脊負つて、お絹とお松との駕籠の直ぐあとへついて出かけました。米友の其の風采はお絹をもお松をも笑はせました。

それより三日目に兩國の女輕業の見せ物が開けて、銀床に付きりであつたお角も、どうしても小屋へ歸らなければならなくなりました。その隙を見てがんだりきが根岸のお絹の住居へ駈つけて見ると戸が閉てゐました

「失策つた」  
急いで取つて返して旅の仕度をしてゐる處へ折悪くお角が歸つて来ました。

「お前さん何をしてゐるの」

「何、その些とばかり」

「足ごしらへをして何處かへお出でなさるの」

「何、近所まで」

「近所の何處へお出でなさるの」

「何、そんなに遠い處ではない」

「そんなに遠い處でなければ足ごしらへなどをしなくても宜いじやないか」

「でも、久しく旅をしないから」

「おや、久しく旅をしないから何處かへ旅をして見たくなつたといふんですか、知つてますよ、その旅先はちやあんど呑み込んでゐますからね」

「何、少しばかり足慣らしをやつて見るんだ」

「出かけるなら出かけて御覽なさい、わたしといふ者をさし置いて行けるものだから行けないもんだか、さあ出るなら出て御覽なさい」  
お角は其處にあつた荷物と、がんだりさが結びかけた脚脛を取つて抛ります。

「何をするんだ、やい巫山戯た事をするな」

がんだりさは其の脚脛を取つてまた片手で足へ巻つけやうとすると、

「可けませんよ、わたしの見る前でそんなものを足へ巻つけると罰が當りますよ」

「やい、何、何をするんだ」

「何をするんだも何もありません、わたしが此の間から見張つてゐるのは何の爲だと思つてるの、此んな事が有るだらうと思ふから

其れで忙がしい小屋の方をさし置いて、此方へ來てゐるんじやないか、それに一寸の隙があれば、もう此の仕末だから呆れ返つちまうぢやないか、あれまだ其んなものを足へ巻きつけて、片一方手で捻くり廻してゐる無器用なザマと云つたら、ほんとに突き倒してやるよ」

「な、なにをするんだ」

「突き倒すよ、片一方手じや起きられないだらう、獨り立で起きられもしない癖に、よくわたしを踏みつけにしたね」

「お前は何か感違ひをしてゐるやうだ、おれは今日組合の方の寄合で千住まで出かけなくぢやならねへのだ、それで遊散旁、久しぶりで草鞋を穿いて見やうと云ふんだ、何もお前に疑ぐられるやうな筋は有りやしねへ」

「冗談をお言ひでないよ、火事場へ行くんじやあるまいし、千住まで行くに草鞋を穿いて行く奴があるものかね、組合の寄合に足ごしらへをして行くなんて、そんな馬鹿々々しい事があるものかね、千住が餘ほど遠くつてお氣の毒様」

「如何も手が着けられねへ、お前が何と云はうとも友達が待つてゐるんだ、約束がしてあるんだから、やめる譯には行かねへ」

「おや、友達が宜かつたねへ、そりや其様でせうとも、いゝお友達が有りなさるんだから、一刻も早く行つてお上げなさる方が宜いでせう。向ふ様も嘸待つておゐでなさるでせうけれども、わたしと云ふものがあつて見れば、さうも参りませんでお氣の毒様、ほんとにお氣の毒様」

と云つてお角は口惜しがりながら、いゝいゝを横の方から突き倒す。

「此の阿魔、あんまり圖に乗ると承知しねへぞ」

突倒されたが、いゝいゝは起き上がつて眼の色を變へると、

「さあ、わたしに恥を掻かせたあの後家さんの尻を追つて行きたいんだらう、何處へでもおゐで、グルになつてわたしを出し抜かうとしたつて、わたしの眼の黒いうちは……」

お角はまた口惜しがつて武者振つきました。

# 大菩薩峠

(市中騒動の巻終)

大菩薩峠

大菩薩峠

(阿井雄登之守の巻)

中里介山著

甲府の神尾主膳の邸へ來客があつて或夜の話  
 「神尾殿、江戸からお客人が見えるさうだがまだ到着しませぬか」  
 「女連の事だから、まだ四五日はかゝるだらう」  
 「何しろ有名な難路でござるから、上野原あたりまで迎への者をやつては如何でござるな」  
 「それには及ぶまい、關所の方へ會釋のあるやうに話を置いて置いたからまあ道中の心配はあるまいと思ふ」



「關所の役人が心得てゐる事なら大丈夫であらうが、貴殿御自身に迎へに行く心があつたら近い處まで行つて御覽になるも宜しからうと思ふ」

「然らば勝沼あたりまで行つて見やうか知らん」

「勝沼までと云はず、一層笹子を越えて猿橋あたりまで行つて見ては如何でござるな」

「笹子を越えるのはチト億劫だが併しまだ天目山の古戦場を初め、あの邊には見て置きたいと思つて其の機會を得ない名所が幾らもある、さう云はれると此の際行つて見たいやうな氣持がする」

「行つて見給へ、江戸からのお客といふのを途中で迎へて、それを案内してあの邊の名所を見物し、その歸りには鹽山の湯にでも浸つて見るも一興であらう」

「左様、それでは一つ氣休めをして來やうかな」

「それが宜からう」

と語り合つてゐる一人は神尾主膳で、一人は分部といふ組頭。この二人が別懇の間柄であることは此の會話でも知れます。この話をし  
てゐる處へ、

「お客様、山口四郎右衛門様がお出でになりました」

「ナニ、山口殿が見えたぞ、それは丁度よい、分部殿も居らるゝ、

直ぐにこれへお通し申すがよい」

「畏まりました」

間もなく山口四郎右衛門といふのが入つて來ました。

「やあ、分部殿もお居るか、大分寒くなりましたな、山國である故寒さの來ることも早いのは是非もないが、それにしてもまだ此んな

筈はあるまい』

「左様、八ヶ岳にも雪が深いし、地蔵岳も大分被りはじめたやうだから、それが風の加減で甲府の空を冷たくするのであらう、中々寒い』

「まあ、此處へ来て温まり給へ、寒さ凌ぎに一献参らせる』

「催促をしたやうで恐れ入るな』

「拙者ひとりで寒さ凌ぎをやらうと思つてゐた處、折よく分部殿がお見え、それにまた貴殿のお出で、甚だ嬉しい、悠くりと寛いで行つて呉れ給へ』

三人は飲んで漸く興が加はる時分に、山口四郎右衛門が何をか不平面に、

「御兩處、近いうちに新しい勤番支配が來ることをお聞きなされた

か、その風聞が多分御兩處の耳にも入つた事と存ずる』

「ナニ、支配が來ると、然らば今まで缺けてゐた勤番支配の穴が埋まるのか、それは初耳じや、我々はトンと左様な噂を聞かぬ、して如何なる人が何處から來るのじや』

神尾と分部とは、自分達の上に立つべき勤番支配の一人が新しく任命されて來るといふ報告を山口の口から耳新しく聞いて意外に感じました。單に意外に感ずるばかりではなく、不安と妬心とがきらめいて見えるのです。

「左様か、まだ御兩處には其の事をお聞き召されなんだか、然らばお話し申さう、此の度お役目を承はつて我々共の支配に來るのは表二番町の駒井じや』

「ナニ駒井、二番町の駒井能登が來るのか、あの駒井が』

神尾主膳は人事でないやうな思ひ入れで、急がはしく眼ばたきをしました。

「如何にも其の駒井能登守」

「左様か、駒井が来るのか」

神尾は絶望して取つて投げるやうな返答ぶりでした。

「太田筑前殿は老巧者だ、我等が上に戴いても敢て不足はないが、駒井は何者だ、あれは我々よりズツト年下、然も知行高も格式も以前は我々に劣ること數等、若い時は眼中に置かなかつたものじや、今となつてあれに先を越されて剩つさへ、我々が支配として頭に頂かねばならぬとは情ない、あゝさう聞いては酒が旨くない、世の中が面白くないわい」

「それは我々も同じこと、成程、駒井は學問は多少有るには有るだらう、我々が道樂をして遊んでゐた時分に、彼奴は青い面をして書物と首つ引をしてゐたのだから、相當に理窟は云へるやうになつたらうけれど、それよりも彼奴の得手は上役に取り入ることだ、老中あたりに縁があつて胡麻を擦つた其の恩賞で引上げられたのだ、彼奴は頼もしさうな面をして老中あたりの頑固連を口説き落とすには妙を得てゐる」

「駒井も駒井だが老中も老中だ、一體我々甲府勤番を何と心得てゐる、成程いづれも相當に仕たい三味をし盡した報りで、こんな狭い天地に逼塞はしてゐるけれど、以前を云へば駒井の上に出でるものは幾らもある、云はゞ甲府勤番は苦勞人の集まり、粹人の巢と云ふべきだ、容易な人間で其の支配が勤まると思はれるのが大不足だ、相當の人を遣はすのが、我々へ對しての禮じや、然るに駒井如き若

年者を寄越して我々の頭に置かうなぞとは、見給られたも亦甚だし  
い哉、二百餘名の甲府勤番が其れで納まるか知らん、駒井を頭に  
たゞいて唯々諾々と其の後塵を拜して納まつてゐるか知らん、若し  
それで納まつてゐるやうなら世は末だ、徳川の天下もいよいよ望み  
なしじや」

「その通り、我々が不平なるが如く、二百餘名の勤番誰とて駒井を  
快く思ふものはあるまい、さりとして公儀からの御役目、それを反  
くといふわけにも行くまい、いよいよ駒井が來たら我々共の覺悟は  
如何じや、如何なる思案を以て駒井を迎へるか、黙め腹を定めて  
置かねばなるまい」

「拙者は病氣所勞と披露して當分は引籠る」

「病氣所勞も宜からうけれど、いつまでも左様は云つて居られぬ、

もつと男らしい手段はないか、甲府勤番の反の強さを見せつけて駒  
井の膽を奪ふてやるやうな仕事はないか、駒井が着早々縮み土がつ  
て尾を捲いて向うから逃げ出すやうな謀があらば、これ以て甚だ  
痛快なる儀じや」

「成程」

「機先を制して駒井能登を壓倒するのじや、さうして甲府勤番には  
骨があつて、彼等如き若年者で支配などは以ての外といふ處を老  
中にまでも思ひ知らせてやるのじや、それをせねば後來の爲もある」

「成程」

こゝに三人の不平が火を發するほどに強くカチ合つて、さうして彼  
等の上に来るべき年の若い新しい支配といふのを呪ひ盡すの相談が  
持ち上つてしまひました。

甲府の勤番支配は三千石高の芙蓉間詰であります。その下には與力が十名と同心が五十人づゝあつて、五百石以下の勤番が二百人は甲府の地に居住してゐます。支配は二人であることもあり一人は缺員のまゝであることもあります。御役知は千石で本邸は江戸にあつて住居は甲府へ置く。

駒井能登守が勤番支配に任命されたのは如何いふ意味だかよく譯りません。或者はこれを榮轉だとして嫉みます、或者は左遷だとして悲しみます。兎にも角にも能登守がまだ三十に足らぬ若年者であつて此の地位に置かれたことは、ドチラにしても其の人物の非凡である證據にはなりません。

その頃の幕議に長州出兵論といふのがあつた。薩州と長州との横着が餘りといへば目に餘る、如何しても先づ長州から征伐してかゝら

ねば幕府の威信が地に落つるといふのが長州出兵論の根據であります。この長州出兵論を唱へる者の中には、徳川譜代恩顧の者で徳川に取つては無二の精忠者があります。是等の人は本心から薩長あたりの暴慢を悪んで、徳川の爲に死なうといふ連中でありました。また夫等の熱心な長州出兵論を鼻の先でせ、ラ笑つてゐる者もありました。これは徳川とは餘り縁の薄い方の平民側の中の蔭口に多いのです。その言ひ草を聞けば、

「ナーンだ、長州出兵なんて、餘計なことだ、お膝元を見るがいゝ、貧窮組があゝして騒ぎ廻つてゐるじやないか、貧窮組があゝして騒ぎ廻つてゐる間に、頼まれもしない長州くんだりまで兵隊を出して如何する氣だ、そんな事をするよりは印旛沼の堀割でもした方が餘つぽど増した」

こんな事を言つて馬鹿々々しがつてゐる者もあります。また一方には譜代以外の者で盛んに長州出兵に聲援を與へる者もありました。これは随分變り者で、元より徳川の爲に死なうといふほどの縁故もなければ熱心もないのだが、何か景氣をつけて自分達の仕事をこしらへたいといふ浪人者、或は自稱志士の連中に多かつたといふ事でもあります。

口先ばかりでも何でも景氣のいゝ事は雷同し易いから、精忠無二の長州出兵論よりも、景氣のよい人達の唱へる出兵論が、大分徳川に受がよくなりました。罷り間違つても其れに異議を唱へるやうな口ぶりをしやうものなら、徳川に對して反逆者でもあるかのやうに見られたり、薩長の犬であるかのやうに疑ぐられたりしますから、出兵、出兵、出兵に限るといふやうな事に傾いて行きました。何下

もドシドシ兵を繰り出して長州から薩摩の果、琉球までも踏みつぶしてやらねばならぬと意氣込を示した者も大分あつたやうです。この出兵論が正しいか正しくないかは知れないが、いよ／＼事實になつて見ると恐劣を極めたものでした。最初の長州征伐は如何にか斯うにかお茶を濁して幕府の面目をつないだけれども二度目となつてはカラキリお話になりませんでした。幕府の威信を張るどころではなく、却つてグニャ／＼と腰が砕けて長州からあべこべに寄り出されて引込みが着かなくなつてしまひました。

長州征伐をやつても、やらなくても、もう大抵幕府の壽命は定まつてゐたのだから、それがいゝでもなし悪いでもないけれど、兎に角長州征伐をやつたが爲に、徳川幕府の壽命がまだ十年持つ處を九年早めてしまつたやうな形勢は争ふべからざるものであります。

勝海舟のやうな目先の見えたものが——さういふ場合に出て来たからお互に幸でありました。けれども其の勝さんすら、いよく長州征伐が手に負へなくなつた時に引ばり出されたので、それまで引籠を仰せつけられて幕府から勘當を受けてゐたやうな有様でありました。

駒井能登守は此んな時節に甲州の山の中へ来るやうにさせられたといふ事も何かの廻合せでありませう。

駒井能登守が甲府へ入ることを悲しむ連中はこんな事を云ひます。「あれは山の中へ送るべき人間ではない、海の外へ向はせなければならぬ人物だ、外國との折衝がこれほど面倒になつて行く世の中に彼の人物を山の中へ送り込む當局者の氣が知れない、駒井を甲州へやるのは舟を山へ送るのと同じで、併も其の舟も、舊來の傳馬船

や荷足ではなく新式の舶來の蒸汽船だ、蒸汽船を山へ積み込むとは成程此の頃の徳川幕府のやりさうな事だ」

これは駒井最負の方の言ひ分で、駒井が西洋の智識に暗からず、且外交官として相應しい器量のすべてを持つてゐるやうに信じてゐる者の口から出ました。

それと反對の方の言ひ分は斯んなものでありました。

「あれは若い者共には人氣は相當にあるけれど、本人はたゞ西洋の智識を多少心得てゐるといふだけの事で、實務にかけては善い加減の無能者で、時々調子を外れた處で思ひ切つた事をするから、危なくて仕方がない、腫物に觸るやうな此の頃の外國向きの事に彼んな青二才を使へるものではない、甲州の山の中へ入つて、摺れからしの勤番の中で揉まれて來るのが身のゑだ」

これは駒井を多少煙たがつてゐる老成者の間から出る評判でありました。兎に角未知數の人間だけれども、ドの道、まだく叩き上げなければ物にならないといふ嫉妬と輕侮とそれから幾分か敬畏の念も入つてゐるのであります。

さうかと思ふとまたこんな一説もあります。幕府は駒井の人物を見抜いてワザと甲府へ納めるのだ。甲府は天險であつて、萬一徳川幕府がグラつき出す時は、そこが唯一の根城となる、萬一の場合を慮かつて、駒井を遣はして地利や兵備を調べさせて置くのだと、これも亦駒井最負の者の臆想でありました。

また其の他の一説は、駒井能登守が甲州入りをするやうになつたのは、高島四郎太夫に關係することである、駒井は早く四郎太夫に就て洋式の砲術を研究したり西洋の事情を調べたりしたから、高島と

同じやうな嫌疑で此の左遷を蒙つたのだと、これも駒井崇拜の若い人々の口からは洩れて來るのであります。

高島四郎太夫（秋帆）が幕府から怖れられたのは、他の勤王家の連中が幕府から怖れられたのとは全く違ひます。秋帆には大藩を動かして權力を争つて見やうとか、砲術を研究して其れによつて虚名を博さうとか、そんな野心は少しも無かつたものであります。國內の事に空しく慷慨悲憤してゐる連中などの梯子をかけても及ばない處に其の着眼と規模とがあつて、長崎の微々たる小吏でありながら、諸侯の力を借すに獨力でもつて大事を行うほどの實力を持つてゐたから、其れで怖れられたのです。けれども其の秋帆とても、もう罪(?)を赦されて江川太郎左衛門を助けていろく熱心に其の研究をつゞけてゐる時分の事であつたから、何も今更其の祟りが駒井能



登守へ報つて來るといふ理由はない事なのでありました。兎にも角にも、こんな風評の間に送られて、行先ではまた神尾あたりの、あんな悪感情に迎へられて甲府へ乗込む若い支配の前途も多事でないといふ事はありません。

その行列は存外手輕で、僅に輿力同心と小者の類と同勢十人足らずで、甲州街道を上つて行きました。

甲府の城内へも何時出かけて何時到着するといふ沙汰なしに出かけましたから、出迎ひの來るべき模様もありません。

駒井能登守は若くてそうして美男でありました。大森か川崎あたりまで遠乗をする位の心持で、陣笠をかぶり馬乗袴を穿いて十人足らずの一行と共に駒木野の關所へかかつて來ました。

關所の役人も實は驚いた位で、今頃不意に勤番支配がお出にならう

とは思ひませんでしたから、多少狼狽して之を迎へました。能登守は其の關所へ暫らく休息して、關所役人から附近の談なごを聞いておきました。

その時丁度駕籠で乗りつけて來た一人の女が駕籠から出て關所の前へ通りかゝりました。

「これ、其方は何處へ行く」

關所役人が呼び止めますと、其の女は、

「甲府の方へ参ります、如何かお通し下さいまし」

「手形を持つて居るか」

「はい、持つて参りました」

女は鼻紙袋を出して其の中から一枚の厚い御手判紙の疊んだのを役人の前に捧げますと、

「え、其の方は女輕業の藝人を引連れ……かくと申す女であるな」

「左様でござりまする」

「このお手形には廿餘人の一座と書いてあるが、其の者共は何處にある」

「それは後から参りまする」

「待て、このお手形の日附が違ふ、エーと、其の方は今より三月ほど前に此の關所を越えて甲府へ出た事があるやうに覺えてゐるが、此れは其の時の手形だな」

「え、その……」

「成らん、斯様なものは用向の濟み次第お上へ御返納申さねばならん、これを以てお關所を通ることは相成らん」

「では、そのお手形では通れないんでございませうか」

「左様」

「それではお書き換へを願ひたいものでございませう、急に甲府まで参らねばならないんでございませうから」

「馬鹿な事を言ふな、さう急に書き換えなどが出来るものではない江戸表へ立ち歸つて相當の手續を踏んでお願ひ申せ」

「其んな事をしては居られません、わたしの連合が甲府にゐて、急に病ひついて、大へん危ないのでございませうから、何卒、お通しなすつて下さいませ、お手形は古うございませうけれど、此の通り少しも怪しいものではございませぬ」

「怪しい者であらうとも無からうとも、拙者はお關所を預かる役目手形のない者は通すことならぬ」

「それではわたしが困つてしまひます、若し連合にでも亡くなられ

てしまつたら、わたしは死目に合へないじやございませんか、助け  
ると思つてお通し下さいまし』

「解らぬことを申すな、その方の事情が如何あらうともお上の御法  
を曲げるわけには相成らぬ』

「それでも折角お江戸から此處まで来たものが如何してまたお江戸  
へ歸られませう、ほんとに斯うしてゐる間も氣が焦くんでございま  
すから、お通しなすつて下さいまし、女一人位通して下さつたつて  
いゝじやありませんか、お目こぼしといふ事もあるじやございませ  
んか、如何ぞお頼み申しますよ』

この女は女輕業の頭のお角でありました。お角は一生懸命に役人に  
頼み込んで見ましたが許さるべくもありません。

「諄い！この上彼此申すと處分致すぞ』

役人は言葉を荒くして叱りつけます。

「おや、これほどにお願い申すのに判らないお役人だこと』

「何を申す』

お角が餘り強情だから役人は立つて掴み出さうとしました。

縁に腰をかけて見てゐた駒井能登守が、

「これ、松浦』

用人を呼びました。

「はい』

「あの女は血迷ふてゐるやうじや、其方が行つて元來の方へ追ひ返  
してやれ』

と云つて能登守は扇を持つて指圖をしました。能登守が元の方へ追  
ひ返してやれと扇で差し示した方向は、女が元來た江戸の方ではな

く、これから行かうといふ甲府の方でありました。

松浦は其れを心得たやうにツカ／＼と女の傍へ来て、

「これ女、お關所の前で左様な事を申してはならぬ、早く立ち歸つて出直して參るがよい』

と云つて女の手を取つてグングンと引張り出しました。

「これほどにお願い申してお聞き入れがなければ其れまで、ごさいます、若し連合が甲府で亡くなるやうな事になれば、わたしは江戸へ歸つて親類の者や何かに面が會はされませんから、此處で死んでしまひます、お關所の前で死んでしまひます』

「さて／＼女といふ者は聞き入れのないものじや、死にたくば他へ行つて勝手に死ね、お關所を汚すことは相成らぬ』

無理無體に引張り出されたから、女の力で争ふことは出来ません。

「ほんとに口惜しい、わからないお役人だ、解らすや』

お角は引摺出されてしまひましたけれど、其の引摺出された處は意外にも甲州口でありました。

「愚者奴』

ボンと關所の外へ突き放されて腰が砕け、暫らく起き上れないでゐたが、起き上がった時分に氣がついてお角は喜びました。

「あゝ、わかつた、あの若い殿様が粹を利かして下すつたのだ、元來の方へと云つて、ワザとわたしを甲州口の方へ突放すやうに御家つぱり女だから馬鹿だね、殿様有難う存じます、あとでお禮を申し上げまする』

お角は起き上がつてお關所の方へ向いてお禮を云ひました。

それから大急ぎで甲州の方へ歩いて行きました。

がんだりきに出し抜かれてしまつたお角は斯うして前後の考へもなく其のあとを追かけて來ました。お角に取つては、がんだりきが其れほどに可愛ゆいわけではなく、お絹といふ女が憎らしくて堪まらないのです、あんな古證文を突きつけて人を馬鹿にした上に、またがんだりきと一緒になつて此れ見よがしの振舞でもされた日には、意地も我慢もあつたものではないのですから、お角は後を追つかけて來ました。

腕こそ一本落したけれど、足の方に變りのないがんだりきの歩きぶりに到底、お角の足を以て如何ともする事は出來ません。ましてがんだりきの方は變則な道を通り、裏道を行くのは慣れてゐるから、お角が追ひかけて見た處で到底ものにはならないけれども、ドノ道行く

道筋は甲州街道で、落ち着く所は甲府、先へ行つたのは女連、途中何處かで追ひつかなければ、甲府で落ち合ふ、その時は、がんだりきとあの御家様をつかまへて、思ふ存分荒れてやらうと、例の如く懐中には剃刀なんぞを忍ばせて駕籠を飛ばせて來たわけです。

幸に旨くお關所が抜けたけれど、これから先が本當の難所、女一人で通れる筈の道とも思はれません。

お角が一人で小佛の方へ行つてしまつてから駒井能登守の一行が此の關所を立つて同じ方向に出かけました。

關所で駕籠乗物の用意をするといふのを謝絶つて、やはり馬で行きました。險阻な道へかゝつたら馬から下りて歩くと云つて出て行きました。

小佛の宿から峠まで二十六丁。

「併しあの女は愚かな女じや、駒木野を越わたからとて、まだ此の先に上野原の關所もあれば、駒飼の關所もある、關所よりも尙ほ難澁な小佛峠といふものもあれば笹子峠といふものもある、それを知つてか知らずか、女一人で甲府まで乗り込まうといふのは、大膽と云はふか、愚かと云はうか」

これを話のはじめに、與力同心の中で色々の話が持上がりました。

「いや、あれは眞實亭主の病氣を思ふて出かけて來たのか如何か判らんが、兎に角何か思ひ込んで來たやうな女である、あんなのが何か思ひ込むと大膽な事をするものじや」

「左様、女輕業の元締とか云ひ居つたが、彫物の一つもありさうな女じや、併し悪黨では無いらしい」

「悪黨ではあるまいが、悪黨に變化しさうな女である、あれが悪黨

になると鬼神お松といつた形でこの峠の上などに住みたがる」

「いや、さういふ事はあるまい、あんなのは罷り間違つて亭主を刺刀で切るとか、胸倉を掴んでギウと締めるとかいつた程度で、それ以上の大外れた事は出來まい、寧ろ平常は内氣で口も祿に利かないやうな女が、時とすると大膽な事をする」

「それは何方とも言ひ兼ねる、女はハズミ一つであるから、そのハズミの具合によつて如何な事をやり出すか豫かじめ斷りは出來ない女その者の性質といふよりも、時のハズミが女を賢婦人にしたたり毒婦にしたりする例が多い」

「それも一理はあるやうじや、併しそれではハズミと云ふものを餘り重く見過ぎた嫌ひがある、如何にハズミが附いたからとて政圖が鬼神お松になることは無からう」

「性質にもよりハズミにもよる、罪は其の兩方にあると見るのが穩當であらう。明智光秀の如きも信長公があれば、たゞへ信長公が短氣であつたならば、謀叛はしなかつたであらうが、たゞへ信長公が短氣であつた處で、光秀其の者に謀叛氣が無ければ、あんな事にはならぬ」

「要するに鐘と撞木の間に鳴るといふ處で我々共の役目に於ても其の通り、強く罪人を扱ふて却て罪を大きくしてやることになり、或は寛かに扱ひ過ぎて却て増長を來すやうな事もある」

「寛嚴宜しきを得たりといふことは治政の要術で、その術はまた治者の人格である、下らぬ人格の者が、みだりに寛嚴の術を弄すれば却て人の輕侮を招く」

「大阪の興力、大鹽平八郎の事件などがそれじや、あれは跡部山城守殿が大鹽を見るの明が無いから起つた事である、奉行が大きければ

ば大鹽は非常な用をする、奉行が小さくして大鹽が大きかつた故あんな事になつたといふ説がある」

「大鹽は兎に何代での人物である、是非善惡は論せず貧民の爲にあれほどの事を爲し得る奴は他にはあるまいと思はれる、あの亂も亦大鹽自身の人物もあらうけれど、時のハズミといふものも無さにあらん」

「國民の富豪に對する怨恨が漸くに熟してゐたから火蓋が切れたのじや、それに就けても思ふのは此の頃、江戸に起つた貧窮組、淺ましいやうでもあるし、可笑いやうでもあるが、あれも亦時世を驚しむる一つの徴候」

駒井能登守の一行は時事を論じたり、風景を語つたりしながら、小佛峠の頂上まで登つてしまひました。

頂上ちやうじやうに中の茶屋ちややがあつて其處そこに休やすんで見みると赤飯せきはんがありました。その赤飯せきはんを大番振舞おはんぶるまひにして與力同心よりきどうしん、仲間馬方ちうげんうまかたに至いたるまで食くひました。能登守のこのかみも亦またそれを抓つまんで喜よろこんで食くひました。なほお茶ちやを飲のむものもあれば水みづを飲のむ者ものもあります。頂上ちやうじやうまで上のぼつて見みればこれからは下くだりであります。下り道くだみちは上り道のぼみちよりも樂らくであります。上野原うへのはら泊とまりの豫定よていは遊あそびながらも着つく事ことが出來できるのであります。能登守のこのかみは柄がらに似合にあはない健脚けんきやくでした。一番早いはやくく參まゐるだらうと思おもはれた能登守のこのかみが一番はんつが疲つかれないで歩あるいて來きましたから、

「御支配ごしはいは健脚けんきやくだ、いや身體しんたいの華奢きゃしゃなものは其それだけ足あしの負擔ふたんが輕かろいからそれで疲つかれないので、我々われわれは頑健肥滿ぐわんけんひまんに生うまれた罰はつで却かへつて山路やまみちに難澁なんじゆうする」

と云いつて與力よりきの中うちで一番肥滿はんひまんして一番はんよく話はなしをした男おとこが一番早いはやくく疲つか

れて愚痴ぐちを云いひました。

「各おのづかた方は、餘あまりよく口くちを利ききなさるから其それで疲つかれるのだらう、すべて險岨けんそを通とほる時ときや遠路とほみちをする時ときは、あまり口くちを利きかない方ほうがよ

いさうじや」

能登守のこのかみは斯かう云いつた。成程なるほど、一番疲つかれない能登守のこのかみが一番喋はなしべらなかつた。

「無言むごんで氣息きそくを調せうへて歩あるけば宜よろしからうけれど、そこが旅たびは道みちづれで、色々いろくの話はなしをして歩あるきたいのが凡夫ほんぶの常つねだ、よし／＼今度こんどは無言むごんの業げふを續つづける」

兎うさぎに角かく、中なかの茶屋ちややで休やすんで、赤飯せきはんなどを嚙かじつてゐると、誰たれも彼かれも疲つかれなんどは一時じに忘わすれてしまひました。その元氣げんきで茶屋ちややを立たつて下くだりにかゝりましたが、上のぼりに懲こりて無言むごんの業げふを續つづげると云いつた肥滿ひまん



の奥力は、漣面を作つて口を噤んで歩きましたが、それに引かへて能登守が今度は色々の話をやり出しました。街道筋の地勢や要害を指さしながら土地案内の奥力同心に聞いて見たり自分の意見を述べて見たりしました。時々諧謔を弄して一行を笑はせたりしました。

それで話の花が咲いて、登りの時よりは一層賑やかになりました。強いて口を噤んでゐた奥力の連中も亦談話中の人となつて疲れた足を引づりながら、息を喘ませて氣焰を上げてゐました。山腹の左の方から溪水が湧き出て瀧のやうに流れてゐます。それが深い谷に落ちて淵になつたり、また巖に激して流れ出したりする變化が面白い。其の溪水を幾十曲りもして見ると向ふに二軒の茅屋が見える。その前に板橋があつて、溪水が其處へ來て逆に流れてゐる景色が中々面白いから一行は其處で暫らく立つて景色を見てゐました。

た。さうすると駒井能登守が、

『あれ見よ、あの家の後を怪しげな男が通るわ』

と云ひました。一同は谷川の景色ばかり見てゐたのでしたが、能登守に斯う云はれて前の山の二軒の茅屋の處に眼をうつすと、其處を一人の旅人が急速力でサツサと歩いて行くのを認めます。背笠を被つて道中差を差して、足ごしらへをしてキリ／＼とした打装で、向ふ岸の茅屋の後を飛ぶが如くに歩いて行きます。

『あれは何者だ、足の早い奴』

と驚いてゐると、能登守が、

『如何にも怪し氣な奴じや、關所の裏を通つたものと見ゆる、誰ぞ行つて追蒐けて見られよ』

『心得ました』

同心が二人、板橋を渡つて向ふ岸へと飛んで行きました。

怪し氣な旅の男はそれを知つて山の中へ逃げ込んで皆くれ姿を隠したから、追ひかけて行つた同心は空しく歸つて來ました。

『怪しい奴、足の迅い事無類でござりまする』

同心は先づ以て其の逃げ去つた奴の足の迅いのに舌を捲いて復命しました。

『年はまだ若いやうであつたな』

『年はまだ若いやうでございました。三十の上を幾つか越した位、遊び人風の男で、後ろ姿をチラリと見かけましたが、其の迅い事迅い事』

『何しても怪しい奴じや、すべてあの通り足の迅い奴には悪い事をする者が多い、よく演劇や講談に現はれる雲霧仁左衛門といふ悪漢』

も足の迅い男であつたさうじや』

『あゝ、その雲霧仁左衛門といふ悪漢、それは此の上野原から出た奴にございます、この上野原の然るべき家に生れた悪漢でございました』

『足が迅いと高飛が自由に出来る、それで今日此處で悪事をして明日は他國へ行つて知らぬ面してゐる、悪事千里を走るとは此の事じや』

『足が迅いから自然手が長くなるのでございませう、冗戯はさて置き、あの怪しい奴、取り逃がしたは残念、直に手配を致して取押へさせませう』

『それには及ばぬ』

『折角、御支配のお目に留まつたものを取り逃がして面目がござり』

ませぬ」

「向ふの岸と此方では無理もない事じや、まして人間並を外れた足の迅い奴、逃げるのが當り前で、逃がした方に罪はない」

「それと知つたら、聲を掛けずに何か手段が有つたらうものを」

「これから先の事、甲府へ入るまでに屹度、あの者が再び現はれる事があるに違ひない、その時は油断せぬやうに」

「心得ました」

與力同心の面々が皆多少の好奇心に嗾られました。元より是等の人がワザ／＼手配をして騒ぎ立てるほどの代物ではないが、道中の腕比らべといふやうな事になつて見ると多少の張合が出て來るのでありました。それ故、無駄な事と思つたものまでが、休み茶屋や泊り、泊りにも用心をして見る氣になりました。併し乍ら別段に變つた

事もなく與瀨の宿へ入つて、これ／＼の者の姿を見かけなかつたかと尋ねて見ても、誰も其んな者を見かけたといふ者は無く、

「たゞ、先ほど峠道で若いお神さんが悪者に苛められてゐる處を、鳥澤の親分が通りかゝつて連れておいでになつたばかりでございませぬ」

と土地の人が云ひます。

「若いお神さんが悪者に苛められてゐる處を鳥澤の親分が助けて連れて返つたと、して其の若いお神さんといふのは……また鳥澤の親分といふのは何者」

與力同心が土地の者の言葉尻を捉へて其れを訊ねて見ました。

よく聞いて見ると峠道で悪い胡麻の蠅にかゝつて苦しめられてゐたといふ女は、駒木野の園を通してもらつた女であつて、それを助け

た鳥澤の親分といふのは鳥澤の衆といふ親分である事がわかりました。

鳥澤の衆といふのは郡内切つての親分であつて、随分悪辣な事をす  
るし、また相應に義侠らしい事もする。この界限では厄介物視して  
ゐるものが半分と、畏服してゐるものが半分といふ勢力である事も  
直ぐにわかりました。

それを聞いたゞけで、駒井能登守の一行は例の通り上野原までやつ  
て來ました。上野原の宿の本陣の宿へ着いた時も先觸が無かつたか  
ら役員共を驚かしました。

「御支配のお着」といふ事は本陣を大へんに騒がせたけれども其の  
外には至つて無事で一泊して翌日早朝に出立しました。

上野原を出て少しばかり坂を下ると、もう直ぐに川であります。川

の兩岸には川越の小屋が立つてゐて、眞裸になつた川越人足が六七  
人ほど散らばつてゐるのが一目に見えました。

「これが鶴川の渡し場でございます」

「成程、先年諏訪因幡守殿が人足共に困らせられたといふ渡しはこ  
れか」

「あれ以來、人足共も大分大人しくなりましたが、やつぱり氣の荒  
い郡内の溢れ者でござるから、折々旅人が難儀する由でござります  
る」

「行々は何とか取締りをしたいものじや、何處へ行つても、この裸  
蟲には弱らせられる」

一行は川越の小屋の處まで來ると宿役人から先に出向いてゐて、頻  
りに人足を指圖してゐました。

「おい、御支配のお通りだ、他の旅人は控えてゐるが宜しい、御支配のお通りが濟んでから通らつしやい」

と云つて、川の兩岸の通行を暫らくさし押えました。それが爲に兩岸に多くの通行人が溜つて駒井能登守の渡つてしまふのを待つてゐました。

「如何したのか、兩岸に人が集つてゐる」  
能登守は不審に思ひました。

「御支配様、如何ぞこれへお召しなすつて下さいまし」  
運臺を持つて來ました、屈覓な男が二十人ほどで其の運臺を擔ぐのであります。

「お役人様方は、どうか野郎共の肩にお召し下さいまし」  
與力同心の面々は肩車で越えるといふ事であります。其の他中間槍

持鉄箱擔ぎ馬方に至るまで皆人足の肩を借りたり手を借りたりして中々大業な事でありました。駒井能登守はそれと氣がついて、

「宿役人、こんな大業な事をしないが宜かつた」

能登守は仕方が無しに其の運臺に乗りました。二十人の人足が曳々聲を出して其れを擔ぎ上げました。甲州に入つての勤番支配の權威は絶大といふべきものです。此の街道を通る參勤交代の大名は餘り數が多くは無いが、それ等の大名が通る時よりも勤番支配の通る時の方が鄭重でありました。

能登守は、それが爲に數多の通行の人を留めてしまつた事を氣の毒に思つて早く手輕に通つてしまひたいのだが、鄭重にする爲に宿役人は川足人足の勢揃ひや人數配りに手數をかけて中々に時間を取るのであります。能登守の運臺がやつと擔ぎ出されて與力同心の面々

の肩車が、それにつどかうとした時に上野原の方から慌しく此の場へ飛んで来たのは誰有らう、宇治山田の米友でありました。

## 二

米友は例の通り跛足を引いて杖をついて横つ飛びに此の河原まで駆けて来ました。

「通して呉れ、通して呉れ、俺等が悪いんじや無え、まだ出かけねへど云ふから、それで安心して待つてたんだ、處が出し抜かれたんだ、彼双の口前に引かゝつて、無駄話をしてゐる間に出かけられちやつたんだ、愚圖々々してゐると俺等が申譯の無え事になつちまうんだ、どうか通して呉れ」

米友は眼の色を變へて川を渡らうとしますから、宿役人や人足までが驚きました。米友の事ですから、あんまり周囲の事情に見境がなく、笠と首根ツ子へ結びつけた風呂敷包が上になつたり下になつたりするのを拘はず、無論勤番支配であらうが、奥力同心で有らうが眼中に無く、暗雲に川へ飛び込んで押渡らうとするから、忽ちドツコイと押へられてしまひました。

「やい、手前は何だ」

「通して呉れ、通して呉れ、無駄話をしてゐるうちに出し抜かれちやつたんだ、斯うしちや居られねへ」

「馬鹿野郎」

「何だい、何をしやがる」

「よく眼を開いて見やあがれ、川の向ふも此方も通行留なんだ、皆

んなあゝして御遠慮をしてゐるのが譯らねへか」

「遠慮なんぞをしちやあわれねへ、人から頼まれて乗物の目付をして来たんだ、それが先へ出ちまつたんだ、俺等は其のつもりじゃ無かつたんだ、まだ出かけねへと云ふから、それで安心して待つてたんだ、悪い奴の計略に引かゝつたんだ」

「何を云つてやがるんだい、この馬鹿野郎、引込んでゐやがれ」  
人足は拳を固めて米友を殴りつけてしまはうとすると米友は其の手の下を潜つて飛び出し、

「お前達の手は借りねへんだ、一人で越すからいゝよ」

尻を引絡げて川へ入り込まうとするから人足共がバラ／＼と駈けて来て米友を圍んでしまひ、その手を持つてギウ／＼引き立て、

「方圖の無え馬鹿野郎だ」

ポカ／＼と二つ三つ食はせてしまひました。

「おや／＼、打つたね」

「まだ、あんな事を云つてやがる、叩きのめして箠卷にしてやれ」

「ナゼ打つんだい、えゝ、ナゼ俺等を打つたんだ」

「この野郎、小の癪に口の減らねへ野郎だ」

「まあ、おちさん待つて呉れ、打つんならお打ち、打たれてもいゝから其の代り、おちさん此處を通してお呉れ、ね」

米友は、それでも人足と争ふことの不利なるを覺つてか、一ばしの智慧を出して妥協を試みやうとしたが、どうして此の場合、川越人足が米友の口前位で承知するものではありません。

「面倒臭いから、叩きのめしてしまへ」  
争はずしてゐる米友を、又も拳を上げてガンと食はせました。

「あ、痛え！」

米友も、さすがに面をしかめて痛みを怵へねばならぬ位に手強く打たれて、思はず片手で頭を押えた時に續けざまにボカ／＼と拳の雨が來ましたから、米友の肝癢が一時に破裂しました。

「もう、勘辨が出來ねへ、此奴等甲州街道の川越の人足共、あんまり人を馬鹿にしやがるな、こゝは手前達の川じや有るめえ、甲州街道の鶴川だらう、手前達が此の川を持つてるわけじや有るめえ、天下様の往來だい、俺等が通つてナゼ悪いんだ、渡し賃が要るなら呉れてやらあ、手前達は渡し賃を貰つて人を渡しさいすりや宜いんだらう、通すの通さねへの安宅の關の辨慶見たいな御大相な事を云ふない、富樫にしちやあ出來過ぎてらあ、第一手前達は富樫といふ面じやねへ」

さあ可けない、米友はまた啖呵を切つてしまつた。

米友流の啖呵を切つて開き直ると、手に持つてゐた杖を眼にも止まらない迅さで取り直して今自分を撲つた人足の眼と鼻の間に一刺を加へました。

「あッ！」

その人足は引繰返る、餘の人足は殺氣が立つ、人足を一人突き倒して、しばらく彼等を呆氣に取らした米友は二三間河原の向ふへツ、と飛越して岩の上へ跳ねあがり、

「俺等は伊勢國から東海道を旅をして江戸の水を呑んで來た宇治山田の米友だ、東海道には天龍川だの大井川だのといふ大きな川があるんだ、こんな山ん中の些ぼけな川とは違つて水もモツトうんど有らあ、そこには川越の人足も幾百人とゐるけれども手前達のやうな



譯のわからねへ人足は一人も居なかつたんだ、おちさん、俺等は此の通り足が悪いんだから大事にして通してお呉れと頼めば、ウン兄い氣をつけて歩きねへ、轉ぶとお前は脊が低いから浅い處でもブクブクウをするよなんて云やがるから、馬鹿にするない、脊は低くつても泳ぎが出来ると威張つてやると、あはゝと笑つて通すんだ、手前達は山の中の猿だから世間を知らねへや、だから教へてやるんだ、東海道の川越人足は左様したものだ、同じ人足でも人足ぶりが違はあ、第一面からして違つたらあ、俺等が急ぎだから通して呉れと頼むのを事情も聞かねへで、無暗に撲ちやがる、撲たれていゝものなら撲たしてやらあ、此方に悪い尻があるんなら、幾らでも撲たれてやらあ、此處まで来て撲つて見やあがれ、米友が持つておゐでなさる此の杖は杖と見えても杖ぢや無えんだ、罷り間違つ

たら槍に化けるやうに仕掛がしてあるとはお釋迦様でも氣がつくめえ、やい山猿人足、手前達は世間を見た事が無へから此の米友がドノ位槍が遣へるんだか其の見當がつゝめえ、山猿と云はれたのが口惜しけれや此處まで来て見やがれ、米友の槍が怖いと思つたら、早く川を通せろやい」  
斯う云ひながら米友は持つてゐた杖を片手に取つてブン／＼と振り廻し、猿のやうな面をして白い齒を剝いて罵ると、只さへ氣の荒い郡内の川越人足が、こんな事を云はれて納まる筈がありません。  
「巫山戯た野郎だ、叩き殺せ」  
この騒ぎで、駒井能登守の蓮臺を擔ぎかけた人足も與力同心の股倉へ頭を突つ込んだ人足も皆んな其れをやめてしまつて、米友の方へバラ／＼と飛んで行きました。宿役人は青くなつて其の騒ぎを抑へ

にかゝります。

意外の騒動が起つたので駒井能登守は已むなく其の騒ぎを見てゐました。與力同心の連中もそれを見てゐました。いづれも人足共の騒ぎ、宿役の連中が取り鎮めるであらうから自分達が手を出すまでもあるまい、それで騒ぎの済むのを待つてゐるうちにも、岩の上へ跳上つた米友の無遠慮露骨な罵倒を聞いてハラ／＼しました。人足共も無暗に撲る事は亂暴だが川越人足は川越人足である。これを通つたものを、東海道の人足とは人足振が違ふとか面まで違ふとか山猿がどうしたとか言はんでもよい悪口を言つてゐるのは随分向ふ見すの無茶な奴だと思つて、その鎮まるのを待つてゐるが鎮まりません。

「矢でも鐵砲でも持つて來やがれ」

岩の上に立つた米友を下から渦を巻いて押し寄せた川越人足、何程の事もない取捉まへて一捻りと素手で登つて來るのを曳と突く、突かれて筋斗打つて河原へ落ちる。つゞい

「この野郎」

手捕にしやうとして我勝にのぼつて來るのを上で米友が手練の槍と云つてもまだ穂は着けてないから棒も同じ事。

これだから米友は困りものです。呉々も其の短氣を起すことを戒められてゐるに拘はらず短氣を起してしまひます。無暗に喧嘩を買つてしまひます。槍が出来るといふ自信がある爲に人を怖れないし、それに、どうしても曲つた事が嫌ひだから、ボン／＼理窟を云つてしまひます。

不幸にしてたゞ脳味噌に少しく足りない處があるらしく、それが爲

に時の場合と相手の利害を見ることが出来ません。役人であらうとも雲助であらうとも更に頓着がないから困りものです。

お君でも傍にゐて和めたり諒めたりするから江戸へ来て以來はあんまり大きな騒ぎを持ち上げませんでした。大きな騒ぎを持ち上げない事もない、見世物小屋の失敗などは可なり大きな失敗でしたけれども、それが爲に古市に於ける場合のやうに槍を振り廻すことの無かつたのはまだしもの幸でしたが、今はどうも本式の喧嘩を持ち上げてしまひました。然も其の相手が最も悪い、雲助の中でも最も性質の悪い郡内の雲助ですから、米友も實に飛んでもない相手を引受たものです。

市川海老蔵は甲府へ乗り込む時に此處の川越に百兩の金を強請られた爲に怖毛を振つて後には此本街道を避けて大菩薩越をしたといふ

事、性質の悪い事に於ての甲州街道の雲助は定評がある。その雲助を、あんな事を云つて罵しつてしまつたから、その怒り出すことは火を見る様なものです。何の爲か、この人足は長い竹竿を横にして其れに十數人の人足がつかまつて乗物の先に立つて川を渡す、今其の竹の竿を擔ぎ出して米友を引拂つてしまはうとしました。

駒井能登守の一行は不意の出来事に驚いて暫らく立つて見てゐると巖の上に立つて杖を遣う米友の敏捷な事。

蟻のやうに上りかける人足を片端しから突いて突き落す。寄手がよいよ多ければ、いよいよ突き落す。裸體の雲助が岩の上からパタパタと突き落された處は、丁度千破劍の城を賣めた北條勢が楠の爲に切岸の上から追ひ落されるやうな有様ですから、目をすまして見物してゐると。

「此奴等、俺等の懐中にまだ槍の穂が藏つてあることを知らねえか  
 今斯うして手前達を突き落してゐるのは其の棒だけれど、いよ／＼  
 といふ場合には穂をつけて、本當に突き殺すから左様思へ、今は怪  
 我をしねえやうに密と突いてゐてやるんだ、穂をつけてから、米友  
 が本當に荒れ出したら一々突き殺して、この河原を裸虫で埋めるや  
 うな事になるから左様思へ、何だい、そんな長い竿なんぞを持つて  
 來やがつて、俺等を叩き落さうと云ふんだな、よし／＼其んなら本  
 當に棒の天邊へ刃物を食付けるぞ、さあ此れだ、これをちやあんど  
 棒の先さへつけて槍に組み立てるやうに仕掛けが出来てるんだ、此  
 れで突いたら命は無えんだから左様思へ、面の真中でも咽喉佛でも  
 お望み通りの處を突いてやる、些とヤツツと危ねえんじやねえや」  
 米友が懐中から取り出した笹穂は先生自身の工夫で、忽ちそれを杖

の先に取り着けて、其の穂を左の掌で握つて下へさげ、石突をグ  
 ツと上げて逆七三の構、丁度岩の上に立つて水を潜る魚を覗うやう  
 な姿勢を取ると足を拂ひに來た竹の竿、それを身を跳らして避ける  
 と今上りかけた人足の面の真中から血汐が溢れ出して、

「呀ッ」仰向けに河原へ落ちる。

「野郎、仲間を突きやがつたな、さあ承知が出来ねえ」  
 血を見ると人足が狂ふ。

事態、いよ／＼危険と見たから駒井能登守の手にゐた與方同心が出  
 動せねばならなくなりました。

與方同心の出動によつて此の騒ぎは鎮まりました。併し納まらない  
 のは雲助共、あんな悪口を云はれ、且面の真中を突かれた負傷者を